

令和7年度

木曽農業普及活動実績集

～ 未来につながる木曽の豊かな農業・農村と食～



ドローンによる斑点米カメムシ防除（8月）

令和8年3月

長野県木曽農業農村支援センター

発刊のことば

令和7年度は、エネルギーや生産資材価格など国際相場や為替相場の影響により上昇が続き、農家の皆様にとって厳しい状況が続きました。また、米の販売価格が急激に高騰し需給に影響が出た年でした。

背景には高温障害による精米歩留まりの悪化、訪日客の増加による消費拡大、家計消費の増加など複数の要因が重なり市場不安を招いた年でありました。

木曾地域においても、6月～7月そして9月～10月は平年を大きく上回る高温が続き、特産である御嶽はくさい・すんき用カブ・水稲・そば等をはじめとした多くの作物の生育や品質に大きく影響を及ぼしました。また、畜産においても木曾子牛の繁殖に悪影響が見られました。

一方で、主要作物である「御嶽はくさい」については、生産量は前年対比112%となりました。また、高温障害の影響が大きかった他産地と比べ高い品質を維持できたことから、平均単価は前年比93%を維持し、生産額は104%と堅調な結果となりました。

「木曾子牛」については出荷頭数こそ前年比92%でしたが、全国的な子牛不足の影響もあり12月市場での雄牛の平均価格は70万円を超え、メスをあわせた平均価格でも前年対比で117%となり明るい結果も見られるようになりました。

このような情勢の中、農業農村支援センター技術経営普及課では、町村・関係機関・団体の皆様の御協力をいただきながら、「第4期食と農業農村振興計画」の木曾地域計画「5つの基本目標」に沿って普及活動に取り組みました。

主要課題の「新たな品目導入による産地の活性化」では、酒米・花木の生産振興に取り組みました。

酒米では、生産者・JA・酒蔵メーカーと連携し、長野県育成品種「山恵錦」の栽培・利用拡大に向けた展示ほ場の設置や現地検討会を実施。花木では、「啓翁桜」の早期出荷技術の確立に向けた検討や新規品目の栽培試験に取り組み成果を上げることができました。

加えて、一般活動では、農業・農村を担う多様な担い手の育成、御嶽はくさいの産地強化、木曾地域ならではの農産物の生産振興、畜産経営の安定など8つの普及活動課題の解決へ向けて取り組みました。

また、町村・関係機関・団体と連携し木曾の伝統食「すんき」の認知度向上と販路拡大に向けて、小学校での体験授業や名古屋市中日ビル等都市部での販売イベントなどにも積極的に取り組みました。

調査研究活動では、「斑点米カメムシ類の現地ほ場における2回防除による効果の確認」、「アメリカテマリシモツケの実物花木等の検討」、「御嶽はくさい」における土壌診断に基づいた適正施肥の検討、「稲WCS専用品種「つきことか」の現地適応性の確認・検討」の4課題に取り組み、成果を得ることができました。

この様に、皆様の御協力により、令和7年度「普及活動実績集」を取りまとめることができました。

今後も木曾地域の農業・農村の発展に向け取り組んでまいりますので、引き続き御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

長野県木曾農業農村支援センター

所長 倉田庄一郎

〈グラビア〉 令和7年度 主な活動から（重点活動）



酒米中間検討会（7月）



新規花木中間検討会（8月）



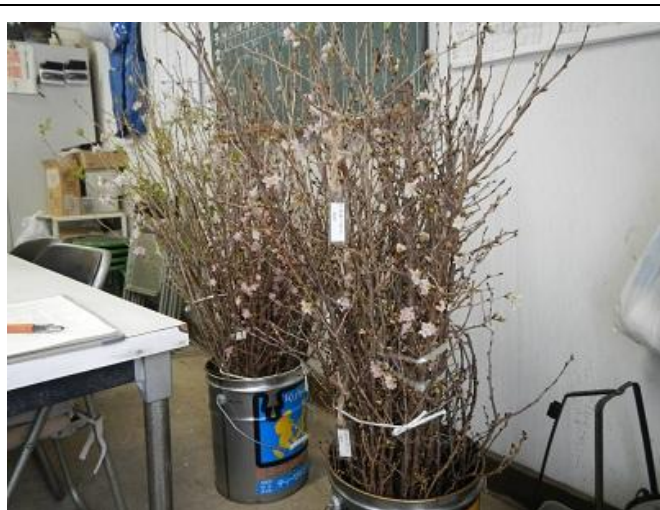
山恵錦展示ほ場（6月）



アメリカテマリシモツケ生育調査（7月）



奨励品種決定ほ場での田植（5月）



啓翁桜開花（1月）

令和7年度 主な活動から（一般活動）



農業簿記講座（1月）



農業入門講座（11月）



新規就農者個別相談（6月）



RC草刈機実演会（11月）



牛乳・乳製品利用料理講習会（7月）



御嶽はくさい減肥試験（9月）

令和7年度 主な活動から（一般活動）



家畜防疫演習（10月）



電気柵設置講習（7月）



有機農業情報交換会（12月）



地域計画協議の場（1月）



木曾牛給食の日（12月）



伝統野菜すんきづくり体験（12月）

目 次

○ 発刊のことば

○ 〈グラビア〉令和7年度 主な活動から

○ 目 次

I 重点活動

課題名：新たな品目導入による産地の活性化

- 地元酒造メーカーと連携した酒米の作付け推進 1
- 花木の生産振興 3

II 一般活動

重点取組1：多様な担い手が支えあう木曾の農業・農村

- 新規就農者の確保と育成 5
- 農業入門講座の開催 6
- 農村女性の活動支援 7
- 担い手への経営支援 8

重点取組2：木曾ブランドを支える産地づくり（土地利用作物、園芸品目、畜産の振興）

- 御嶽はくさいの産地強化 9
- 野菜の生産振興 10
- 米の品質向上 11
- 茶産地の維持に向けて 12
- そばの生産安定 12
- 伝統野菜の生産振興 13
- 家畜飼養管理の改善 13
- 自給飼料生産の拡大 14
- 稲WCSの安定生産および利用 14

重点取組3：みんなが生き生き暮らせる、持続可能な農村づくり

- 野生鳥獣被害対策 15
- 地域計画の実践支援 15
- 地域性を活かした遊休荒廃地対策 16
- 環境にやさしい農業の取組 17

重点取組4：木曾ならではの食による地産地消と食育の推進

- 地産地消と食育の推進 18

Ⅲ 調査研究活動

- 「御嶽はくさい」における土壌診断に基づいた窒素適正施肥の検討 . 19
- アメリカテマリシモツケの実物花木の検討 21
- 斑点米カメムシ類の2回防除による効果の確認 23
- 稲WCS専用品種「つきことか」の現地適応性の確認・検討 25

Ⅳ 参考資料

- 令和7年の気象経過 27
- 令和7年度の主な農作物の生育概況について 30
- 令和7年度職員体制と業務分担表 36

I

重点活動

地元酒造メーカーと連携した酒米の作付け推進

■背景とねらい

木曾地域では、高齢化・担い手不足、鳥獣被害等により農業者の生産意欲が減退し、水稻の作付面積の減少が著しく、水田の荒廃化に歯止めがかからない。そこで、高齢者や小規模農業者にも取り組み易く、鳥獣被害を受けにくい品目として酒米に着目し、地元酒造メーカー4蔵と連携して、県で育成した酒造好適米「山恵錦」の生産振興に取り組むこととした。今年度は、その取り組みの最終年度となる。

■本年度の取組みと成果

1 「山恵錦」の地元需要の拡大と生産者の確保

今年度の木曾管内の「山恵錦」の作付実績は、JA木曾特産振興部会（以下、酒米部会）と4生産者及び酒造メーカーの自社生産分を合わせて、計258aであった。米価高騰のあおりを受け、最終年度の成果目標に掲げていた4haには及ばず、昨年の実績よりも36a減少したが、穂肥の適期施用指導の結果単収が向上し、酒蔵の当面の需要量を満たすことができた。

酒米部会の生産分は契約栽培しているA蔵へ、B蔵は自社生産、4生産者の生産物はC蔵に納入された。

7月に酒造メーカー、酒米生産者、JA、町村、農業委員会等、関係機関を参集して開催した中間検討会では、生産者と実需者間で「山恵錦」

の需給について意見交換し、酒造メーカーが地元産「山恵錦」の品質を高く評価していることを確認した。また検討会の中で、昨年管内で生産した「山恵錦」を原料に醸造した4蔵の酒を試飲し、実需、生産者、関係機関から高評価を得、地元産の「山恵錦」の品質の高さに自信を深めた。



写真2 中間検討会での試飲会

次年度に向けて、新たな生産者を確保することを目的に、地元産「山恵錦」で地元4蔵が醸造した酒のPRイベントの開催について、地域振興局商工観光課と検討を始め、中間検討会で酒造メーカー4蔵に提案したが、米価高騰の影響で酒米も値上がりした中で、新たな商品開発は困難な状況となった。来年は酒造組合木曾支部が主催するイベントで、既存の地元産「山恵錦」を原料に使った商品のPRを県として支援することで、酒造組合木曾支部との間で合意を得た。

「山恵錦」を自社生産しているB蔵では、穂肥の適期施用と省力化が課題となっていたので、早生品種用の全量基肥肥料の試験を実施した。その結果、慣行の分施肥による適期穂肥の増収効果には及ばなかったが、全量基肥肥料でも、概ね穂肥適期に溶出する窒素成分による増収効果の実用性と穂肥の省力化が期待できることが確認された。



写真1 中間検討会



写真3 全量基肥肥料試験を実施

2 酒米新系統の導入検討

B蔵では、県で育成した酒米の新品種「やまみずき」について、県農業試験場と連携して試験醸造を進めており、将来的にこれを原料にした酒の商品化を考えている。そこで地元における栽培特性を把握するために、一昨年はB社で自社生産している「山恵錦」の圃場の一角に展示区を設置して特性把握を行ったが、昨年と今年は将来栽培を委託することを想定して、「山恵錦」の生産者のほ場の一角に展示区を設置し、栽培特性を把握した。試作を委託した生産者の感触は良く、将来、栽培を委託する候補者として期待できた。

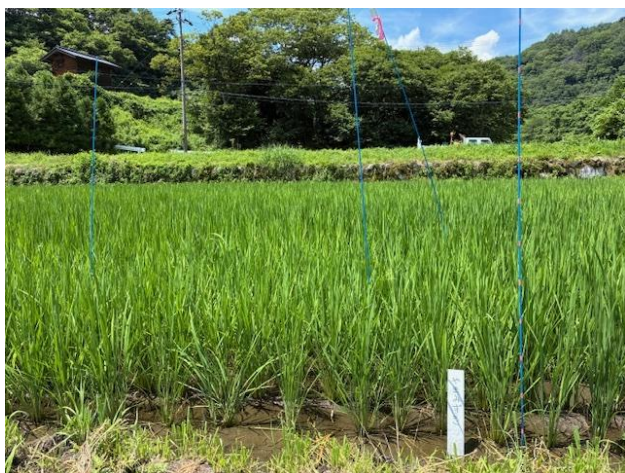


写真4 「山恵錦」の生産者の圃場の一角に設置した「やまみずき」

3 既存酒米生産者組織の活動支援

A蔵と契約栽培をしている JA 木曾酒米部会では、昨年度から「美山錦」から「山恵錦」に全面転換し、今年は2年目となる。

昨年度の栽培の反省から、「山恵錦」の栽培指針により穂肥の適期施用と斑点米カメムシ類の適期防除について重点的に指導し、栽培期間中も現地指導会に対応しほ場ごとに適期を確認しながら指導した結果、一部に除草の失敗から雑草害による減収を見たが、平均単収で昨年度より50kg/10a増収し、1等米比率も昨年度は60%に満たなかったところ100%に向上した。

■今後の課題と対応

1 「山恵錦」の地元需要の拡大と生産者の確保

主食用米の価格高騰により、酒米生産に転換する生産者も容易には開拓できない一方で、酒米の価格も従来より上がったことにより、酒造メーカー側も地元産「山恵錦」を原料に使った酒を容易には増産できない状況にある。しかし酒造メーカー側は地元産「山恵錦」の品質の良さを認識しており、長い目で見て原料を徐々に地元産「山恵錦」にシフトしていく考えでいる。

これに備えて支援センターも、「山恵錦」の生産者の確保を進めていく必要がある。3年間の重点活動課題の中で、生産者と実需者の意思疎通の場を構築し、生産から出荷体制そしてJAを介した酒米の流通体制も整えることができた。今後は地元酒造メーカーの将来の需要増に備えて、生産者の確保と生産技術の高位安定化を目指し引き続き活動していく。

2 酒米新系統の導入検討

B蔵による、「やまみずき」を原料にした酒の商品化の計画は、まだ具体的に決まっていないが、将来の需要に応えるために、現地における栽培特性のデータを整理しておく。

3 既存酒米生産者組織の活動支援

「山恵錦」に切り替えた2年目で、収量面でも品質の面でも、ある程度良い成果を出すことができた。次年度以降は、雑草対策でも失敗しないように誘導していく。

これからも組織を存続させるために、JAと連携して新規生産者の掘り起こしを継続する。

(関連：中山間ルネッサンス事業)

(平出 有道)

花木の生産振興

■背景とねらい

木曾地域は、農業者の高齢化・担い手不足、鳥獣被害等による生産意欲の減退により農地の荒廃化に歯止めがかからない状況にある。

そこで、高齢者や女性・小規模農業者にも取り組み易く、軽量で省力的な鳥獣被害を受けにくい品目として令和5～7年度にかけて花木の生産振興を推進することとした。

■本年度の取組みと成果

1 啓翁桜（ケイオウザクラ）の生産振興

JA 木曾では冬期品目として令和2年度から啓翁桜の栽培が始まった。しかし、樹勢が落ち着き、花芽が増えて出荷できるまで3年以上かかるのが導入上の課題であった。

そこで令和5年度に環状剥皮と矮化剤処理について検討を行ったところ、株養成期間の短縮と花芽着生率の増加、低樹高化を図ることができた。



写真1 花木中間検討会・啓翁桜

今年度は、生産農家とJA、栽培の多い大桑村と協力して、6月に生産者向けの環状剥皮と矮化剤処理の講習会、8月に生産農家やJA、町村、試験場、専技も含めた中間検討会、12月に年内出荷に向けた休眠打破剤の処理と1月にふかし（加温促成）・切り枝と調整・出荷規格の講習会を開催した。



写真2 啓翁桜の休眠打破剤処理



写真3 啓翁桜の年内開花検討

2 新規花木品目の選定と作付推進

JA 木曾花卉部会では、元々流通実績のある花木について令和4年度に2品目、令和5年度に9品目の試験栽培を開始した。

その内、令和4年度のアメリカタマリシモツケ・ディアボロについては、栽培が比較的容易で生産性や市場性、経済性も高いことが確認されていた。そこで、令和5年度から地域の重点推進品目として、講習会やほ場視察、栽培マニュアルの活用を通して生産拡大を図ることになった。

啓翁桜と同様にアメリカタマリシモツケ、オータムハイドランジア等の新規花木についても8月に中間検討会を開催し、生産農家やJA、関係機関の担当者からこれまでの成果、課題等を出し合い検討を行った。



写真4 中間検討会・ディアボロ

アメリカテマリシモツケのいくつかある品種の内、ディアボロは地下水位が高い転作田での栽培でも伸長性に優れ、湿害に強く作りやすい品種である。また、本年度の調査研究で7月出荷の実物花木を検討したところ、同時期に出荷した葉物よりも販売が好調であった。

しかし、樹高が2mまで伸長するため、倒伏・開帳しやすく、通路を塞ぎ作業性が悪くなる課題があった。このことから今年度はフラワーネットや夏の葉物収穫を兼ねた6～7月の台刈りによる低樹高化を検討した。

9月の葉物調査結果でフラワーネットでは倒伏・開帳はなく、低樹高化ではやや開帳したが倒伏はなかった。しかし、台刈りが遅くなるほど切り枝長が短く、株当たり本数も少なくなり、期待した2回切りは出来なかった。

ディアボロの生産拡大については、JAの働きかけにより令和8年から1名、農業入門講座を通して令和9年から1名、新規栽培者が増える動きが見られた。



写真5 中間検討会・オータムハイドランジア

オータムハイドランジアは、夏が高温干ばつであった令和5年に花やけが発生し、高温強日射・干ばつの影響と考えられた。

昨年度は、高温の影響を避けるため開花時期を遅らせて新梢の摘芯（台刈り）による開花抑制と遮光（40％）対策について検討したが、摘芯・遮光ともに花やけ・褐変のロスが多く発生し根本的な対策とはならなかった。花やけ・褐変症状は、花茎が硬化する前に枝が湾曲、水平になった花穂部の排水不良や濡れ・蒸れ、小花からはボトリチス属菌、アルタナリア属菌などがみられたことから高温強日射だけではなく複合的な要因が考えられた。

そこで、本年度は簡易雨除け栽培による花やけ・褐変防止効果とフラワーネットの倒伏・湾曲防止効果について検討した。がく片が着色硬化し採花期となる9月下旬の調査で、雨除けにより大幅に花やけが抑制され、フラワーネットについては、一部ネット上で花茎の軟弱期に湾曲する枝も見られたが、一定の倒伏防止効果が認められた。

その他新規花木類についても、湿田条件下の生育良否から3～4品目が作りやすいと思われた。

■今後の課題と対応

啓翁桜は環状剥皮と矮化剤処理が普及しつつある。大木化したほ場では施肥量の削減、下草の持ち出し等の検討が必要と思われる。出荷期拡大に向けては、低温処理と休眠打破剤による年内出荷の検討と加温促成施設の適切な管理に向けた支援を進めていく計画である。

アメリカテマリシモツケ・ディアボロは、夏の葉物収穫を兼ねた台刈りの時期を5月に早めて秋の葉物の長さや収量を確保していく。またその内一部を越年させて令和9年に2年枝とし、花芽の充実期間による実物の着果段数への影響を調査する予定である。調査結果は栽培マニュアルの改訂に反映させ、活用していく。

ノリウツギは引き続き茎曲がり防止と花穂部の排水を良くするためのフラワーネットの設置、病虫害防除、可能であれば一部雨除け栽培を検討する予定である。

（大島 洋一）

II

一般活動

新規就農者の確保と育成

■背景とねらい

木曾地域の農業者は減少傾向にあり、地域農業を維持するためには新たな担い手確保が望まれている。

そこで、今年度も引き続き就農プロジェクト推進協議会での情報交換や木曾青峰高等学校と協力して農業の魅力発見セミナーの開催、新規就農者への個別支援により新たな担い手の確保や育成支援を行った。

■本年度の取組みと成果

1 就農プロジェクト推進協議会の活動

5月に町村課長等会議で年度当初の情報交換を実施した。各町村やJAの農業の担い手確保支援状況等について情報交換を行った。また、2月には各町村やJAを巡回し、担い手確保の課題等について情報交換を行った。課題として多く聞かれた意見が聞かれたのは、農地の確保が困難であることであった。

2 研修生・新規就農者への個別支援

研修を修了した新規就農者や、国の助成事業を受けている新規就農者3名に対して、個別支援を行った。年度当初に対象者と課題や目標を明らかにしておき、町村やJAと協力して支援した。センターだけでは解決できない課題については専門技術員や試験場の協力も得ながら進めた。

3 農業の魅力発見セミナー等開催

年度初めに学校と年間計画を作成し、9月、11月、2月、3月に開催することとした。

第1回は木曾の伝統野菜の一つである木曾赤カブの一品種「三岳黒瀬蕪」を消滅の危機から復活させて現在その振興を図っている事例紹介を学んだ。中でも、地域振興を図るため直売所を立ち上げたが初日の売上げがとてまもなく苦勞し、それをバネにして現在に至っている話は高校生たちにとっては興味深げであった。

第2回は農業高校出身のレストランオーナーシェフを講師に招き、生徒が育てた伝統野菜等の食材を用いた調理実習を行った。高校生たちはプロ

の技術を間近で見られ、とても勉強になったと感想を述べていた。

第3回の加工研修では、農産物加工施設において自分達の作った農産物を加工し販売まで実際に手掛ける研修ができ、第4回は鳥獣害対策とその活用について、狩猟免許を持って実際に獣害駆除を行い、捕獲後の活用も行っている方を講師に招いて話を伺った。



写真1 農業の魅力発見セミナー第2回目の様子

■今後の課題と対応

就農者確保については、関係者と連携して取り組んでいきたい。しかし、当地域では農業主体の新規就農者確保は農地の確保等の課題があり難しい。よって、多様な形態の新規就農者の育成・確保が重要になってくる。いわゆる農ある暮らし志向者等の確保が重要で、農業入門講座等の集合研修を開催し育成につなげたい。

新規就農者への個別対応は引き続き実施し、経営安定に向けて支援していく予定。

高校生への活動支援においても、農業の魅力を伝えながら高校生が将来農業も選択肢の一つとして考えられるように情報提供を行っていきたい。

(田中 敬志)

農業入門講座の開催

■背景とねらい

木曾地域は農業従事者の高齢化が進んでおり、担い手不足による農業生産量の減少や遊休荒廃地が増加している。また、中山間地域のため農地の条件が悪く新規就農者の確保も難しいのが現状である。

そこで、多様な担い手の確保に向けた取り組みとして木曾地域就農プロジェクト推進協議会（構成団体：町村、町村農業委員会、JA、農業農村支援センター）が中心となって、農業に関心がある定年退職者や移住者等を対象に農業入門講座を平成25年から開催している。

■本年度の取組みと成果

本年度の受講生は8名で、以下の通り開催した。
【令和7年度実績】

開催月	内 容
4月	開講式、オリエンテーション 農作業安全について
5月	土壌肥料の基礎、資材店見学 鳥獣害対策の基礎
6月	病害虫防除の基礎、GAPIについて
7月	新規花木栽培ほ場視察
〃	電気柵設置演習
8月	軽量品目（ピーマン、インゲン等）生産者ほ場見学
〃	直売所訪問（出荷調整について）
11月	修了生のほ場見学（赤かぶ収穫体験）
1月	閉講式 先輩定年帰農者からの体験発表

1 講座の開催

7月に（株）協和テクノを招き、電気柵設置演習を実施した。8月にはJAが推進する軽量園芸品目の生産者ほ場を見学、道の駅三岳を訪問し出荷調整について学んだ。11月には農村生活マイスター一会員にご協力いただき、ほ場で赤かぶの収穫体験を行った。



写真1 軽量園芸品目の見学

2 基礎講座の開催

農作業安全や土壌肥料、鳥獣害被害対策、病害虫防除について座学による講義を行った。また、本講座修了生と講師に定年帰農についての事例発表をいただいた。



写真2 農作業安全について

3 現地視察の開催

希望者6名により、7月に新規花木の栽培ほ場（上松町）を視察した。

■今後の課題と対応

農業生産の多様な担い手確保のため今後も本講座を開催するとともに、受講生にとって魅力ある講座となるようブラッシュアップしながら進めていきたい。また、修了生が農業生産を継続できるよう必要に応じてフォローアップしていきたい。

（木船 宗一）

農村女性の活動支援

■背景とねらい

地域農業の振興、村づくり活動等農村地域の問題解決に女性の立場から取り組む女性農業者リーダー育成及び組織活動について支援した。

■本年度の取組みと成果

1 新規マイスターの掘り起こし

新規マイスター勧誘活動を木曾支部会員と行い、マイスターの活動について理解を得ることができた。その後レポート作成等の支援を行い、1名が新たに認定された。

2 牛乳・乳製品利用料理講習会の開催

国産牛乳・乳製品の需要拡大を図ることを目的にマイスターや女性農業者を対象に牛乳・乳製品料理講習会を7月1日に開催した。災害時にも役立つポリ袋を利用した調理方法を10名で実習した。



写真1 牛乳・乳製品を使った料理講習会

3 王滝村での農業施設視察交流会の開催

令和7年度「第4期長野県食と農業農村振興計画」の女性活躍に関するアクションプラン推進事業として農村生活マイスター会員が県外から王滝村に1ターン・Uターンした若手農業者の施設を視察し21名で交流を行った。



写真2 トマトのビニールハウス栽培視察

4 先進地視察研修の開催

女性が変わる未来の農業推進事業（国庫）を活用し地産地消、6次産業化、鳥獣被害対策について見聞を広げることを目的として11月21日に16名が安曇野市・松本市で先進地視察研修を行った。



写真3 松本市梓川地域での鳥獣被害対策研修会

5 地域における農村文化の伝承事業の開催

農業や風土を背景に木曾地域に伝わる生活や伝統食を次世代に伝えるため講演会「木曾地域の農村文化を伝承するために」、農村生活マイスターによる事例発表、伝統食「笹巻き」の調理実習に30名が参加した。



写真5 伝統食「笹巻き（ちまき）」

■今後の課題と対応

新規マイスター会員を掘り起こすとともに、組織を活性化するための仲間づくりや交流活動について企画・提案を行い、女性農業者リーダーの育成と女性の活躍が活かされる地域づくりにつなげる。

(高瀬 千栄)

担い手への経営支援

■背景とねらい

担い手の経営課題解決に向けてサポート事業を活用した経営支援を検討した。また、県で進めているカイゼン手法を用いた課題解決による経営体への支援も行った。

新規就農者と青年農業者の経営管理能力向上を目指し、昨年度に続き農業簿記講習会を開催した。

■本年度の取組みと成果

1 経営サポート事業による経営支援の検討

令和6年度から第三者継承手続きの相談があり、本年度経営サポート事業の活用を検討した。

まず家族内での同意を得るための書面の様式案を提案し書面上の合意形成をしてもらうよう促した。現在も継続対応中である。

また、木曾町の経営者から規模拡大の妥当性の判断を仰ぎたい旨相談があり、本事業による専門家のアドバイスを受けるべく県との相談と併せ、センター内部で検討した。結果、現状の経営分析の中では規模拡大に伴う投資は困難だとの結論に達し、本人の理解を得た。

2 カイゼンへの取組

令和6年度から新たにカイゼン手法に取り組んでいる農作業受託などを行っている法人の経営課題について、引き続きカイゼン手法を用いて解決することを目指し支援を行った。カイゼン手法を用いて大麦の栽培を水稻作業に影響されないようにしていくにはどうしたらよいかを考え実行してもらい、今年度には概ね適切に作業の両立ができた。

また、今年度からカイゼン手法の導入を目指す経営体へのアプローチを試みた。

この経営体では従業員への作業伝達に時間を費やしロスが生じているとの相談があり、カイゼン手法の理解を深めてもらうため訪問活動を行い、経営者と打ち合わせを行いながらまず従業員に対して何が分からないのかアンケートをとることにしてその案を示した。

まだ、カイゼン手法の理解度が進んでいないためアンケート実施までは至っていないが、次年度

も話し合う中で経営改善の一手法として働きかけたい。

3 農業簿記講習会開催

毎年開催している簿記講習会について今年度は農閑期の1月に3回開催した。

今年度は6名の参加者があり、昨年からの受講生は1名でその他は初めての参加となった。

将来の就農希望者も対象として、農業部門の地域おこし協力隊にも参加希望を募った。

今年度はパソコンを用いず、簿記の仕組みを理解してもらう学習をもらった。講師の話や資料もわかりやすく、多くの質問が出されて意欲的に学習していた。



写真1 農業簿記講座の様子

■今後の課題と対応

サポート事業については、引き続き広く制度をPRして必要な経営者には活用してもらえるようにしていきたい。カイゼン手法は対象者の意向も大事なのでよく話をしながら活用希望者と一緒にこちらも学ぶ気持ちで取り組んでいきたい。簿記講習会は次年度も同様に行い、少しでも経営に興味を持ってもらえる若手農業者を増やしたい。

(田中 敬志)

御嶽はくさいの産地強化

■背景とねらい

高温障害、肥料等の高騰等多岐にわたる課題に対応するため下記の取り組みを行った。

■本年度の取組みと成果

1 環境変化に対応した安定生産支援

(1) 高温期作型における優良品種の検討

野菜優良品種選定調査事業を木祖村において実施、TC1111（渡辺採種場）、THA-610（タキイ種苗）2品種を供試し対照品種信州大福と比較検討を行った。いずれの品種も「信州大福」より優れたものはなかったものの次年度も継続検討を行うこととなった。



写真1 生育調査（木祖村）

(2) 御嶽はくさいの土づくり支援

ア 排水不良の実態調査



写真2 土壌断面調査（木祖村）

木祖村そばほ場(将来的にははくさい栽培予定)にて土壌断面調査を実施した。当日は新規就農者も立ち合い、専門技術員から自らのほ場の改善点等アドバイスを受けた。

イ 適正施肥による減肥に向けた栽培試験

可給態窒素量に基づいた適正施肥を検討するため、開田高原において、5月に施肥・マルチングし、例年生育が最も前進する7月播種、9月収穫の作型で試験を行った。窒素 20%減肥区を設け、9月8日に収穫調査を行った。JA 野菜部会員等と



写真3 収穫調査（開田高原）

検討した結果、当条件下での20%減肥は可能と思われた。

ウ ドリフト防止講習会の開催

7月1日、開田高原にてJA 野菜部会員を対象に、農薬安全使用啓発の一環としてドリフト防止講習会を開催した。当日は病害虫専門技術員より講義を受け、農薬による病害虫防除の留意点等意識統一を図った。



写真4 講習会風景（開田高原）

(小川 章)

野菜の生産振興

■背景とねらい

木曾地域では、高標高地の優位性を生かしたスイートコーンの生産が盛んである。また、夏秋イチゴやミニトマトなどへ意欲的に取り組む若手農業者もいる。そこでこれら特徴的な品目に対する栽培支援を行った。

■本年度の取組みと成果

1 軽量園芸品目の生産振興

(1) 果菜類の安定生産支援

木曾町の夏秋イチゴ農家と王滝村のミニトマト農家2戸の青年就農者について定期的に巡回、栽培支援を行った。

ア 夏秋イチゴの適切な栽培管理支援

「育苗中イチゴ炭疽病に感染しているかどうか調査できないか」との相談を受け、野菜花き試験場から他県で既に実施済みの“エタノール噴霧法”を紹介され調査を行ったところ、サンプリングした検体はいずれも感染が認められなかった。



写真1 エタノール噴霧法



写真2 夏秋いちご培土内害虫調査

コガネムシ類被害と思われる相談については栽培終了後、培地内調査を実施したところ、幼虫が確認され現在飼育中である。

イ ミニトマトの適切な栽培管理支援



写真3 ミニトマト定期巡回

専門技術員の指導を受けながら毎月定期巡回をし、養液 pH、EC を確認し栽培支援を行ったところ昨年以上に収量品質が向上、JA 農産物品評会でも優秀賞を受賞。2月には反省検討会を行い、次年度に向けた技術検討を行った。

2 地域ブランド農産物の生産振興

(1) スイートコーンの栽培支援

ア 地域内堆肥循環型耕畜連携の支援

当地域で養豚経営が新たに開始されたため、スイートコーン栽培における豚糞堆肥施用について木曾町開田高原で検討を行った。

試験区の構成

豚糞堆肥	500kg/10a
牛糞（バーク）堆肥	3,000kg/10a
BBもろこし発肥料	100kg/10a

上記条件で試験を行ったところ、出芽率、初期生育、収量ともに、対照区と明確な差は見られず、豚糞施用は可能と思われ、次年度継続試験を行う予定である。



写真4 豚糞堆肥を施用したほ場

(小川 章)

米の品質向上

■背景とねらい

木曾地域の水稲作は、県下で例年最も1等米比率が低く、令和6年産は67.5%で2等以下の格付け要因は、カメムシ類による斑点米がほぼ9割を占める。山間部に位置し、耕作者の高齢化と後継者不在により、水田の荒廃化が進行していることも被害を助長する一因となっているが、防除が不十分であることも要因として考えられる。

NOSAI 長野木曾支所が事務局をもつ木曾郡農作物等病害虫防除組合（以下、防除組合）が、管内水稲の約5割の面積についてドローンによる斑点米カメムシ類の防除を受託している。防除効果を上げるためには、出穂後の適期2回防除が推奨され、今年度から斑点米カメムシ類による被害が目立つ上松町、大桑村、南木曾町について、本格的に2回防除の受託を始めたところである。そこで、適期2回防除の効果を確認するために、上松町、大桑村、南木曾町の3地点で2回防除と1回防除の効果を検証した。

■本年度の取組みと成果

1 斑点米カメムシ類の防除の徹底

水稲出穂後の適期2回防除の効果を現地で検証するために、防除組合が2回防除を受託した上松町、大桑村、南木曾町において、2回防除のほ場と比較対象の近隣に位置する1回防除のほ場について、斑点米カメムシ類の発生状況と斑点米の発生率について調査した。

その結果、出穂後2回防除することにより斑点米カメムシ類の発生が抑えられ、斑点米の発生率が低下することが確認できた（表1）。

また特筆すべきこととして、ほ場内に雑草の発生が多い場合、2回防除しても、その効果が低下する傾向が見られた。表1の南木曾町の調査結果では、防除回数1回のみほ場内にヒエ等の雑草が多発していたことも被害を助長する要因となっ

たと考えられる。

この結果を防除組合に情報提供し、地区水田作検討会に報告した。次年度以降2回防除を啓発する有効な資料として活用することができる。



写真1 斑点米カメムシ類のすくい取り調査



写真2 すくい取ったカメムシ類をカウント

表1 斑点米カメムシ類のすくい取り調査及び斑点米発生率調査結果：南木曾町

区	出穂期	防除日	すくい取り調査（カメムシ合計頭数）			斑点米発生率 %
			調査日			
			7/31	8/8	8/22	
2回防除圃場	8/1	1回目：8/1、2回目：8/14	1	0	1	0.09
		水田内雑草発生状況	少	少	少	
1回防除圃場	8/1	1回目：8/1	10	2	4	0.25
		水田内雑草発生状況	ヒエ多、ミハギ多	ヒエ多、ミハギ多	ヒエ多、ミハギ多	

防除薬剤：1回目：スミチオン乳剤 8倍液0.8ℓ/10a

2回目：エミリアフロアブル 8倍液0.8ℓ/10a

※1回防除圃場は1回目のみ防除

■今後の課題と対応

生産者に対して2回防除を啓発するとともに、防除効果を上げるために水田雑草の防除についても啓発する。防除組合には2回散布のスケジュールができるだけ適期防除となるよう情報提供をして誘導する。

（平出 有道）

茶産地の維持に向けて

■背景とねらい

南木曾町では、温暖な気候を活かして古くから茶の栽培が行われており、一番茶を手摘みで収穫している。近年は高齢化等により放任茶園も散見されるようになるなどの課題がある。また、温暖化により春先の生育前進による凍霜害被害のリスクが高まっている。

■本年度の取組みと成果

1 生育状況の把握と茶工場稼働日の決定

JAと連携して春先の新芽萌芽状況を巡回により確認し、摘採期を予測した。これを基に関係者で協議し茶工場稼働開始日を決定した。

本年は萌芽期前後の高温により一時的に生育が前進したが、4月中下旬より夜温が低めに推移したことで高標高地にある茶園の一部で凍霜害による褐変症状が見られた。



写真1 摘採期の1番茶

2 病虫害発生状況調査

令和5年に特殊報が発出されたモモヒメヨコバエの発生状況を観察した。ハナモモやサクラに隣接した茶園で葉の萎縮症状が確認されたが一時的な寄生であり、翌年の1番茶への影響は無いものと考察された。

■今後の課題と対応

茶の品質を維持するためにJAや町と連携し適期摘採と凍霜害対策を啓発する。

(木船 宗一)

そばの生産安定

■背景とねらい

木曾は県下でも有数のそばの産地である。これまで支援センターでは栽培講習会や収穫適期情報の提供等によりそばの生産安定に寄与してきた。

今年度も栽培技術指導を継続しそばの安定生産を支援した。

■本年度の取組みと成果

1 「木曾のそば推進協議会」での栽培指導生産者、実需者、JA、町村等、関係機関が参集する協議会の総会において栽培指針を提供し、そばの基本技術について講習した。

2 適期播種と適期収穫の啓発

県の普及技術である「開花最盛期後の積算気温によるそばの収穫適期の判定」により夏そばと秋そばそれぞれについて収穫適期を予測し、JAを通じて情報提供し適期収穫に誘導した。

また、開田高原では播種遅れによる減収が顕著であったため適期より播種期が遅れた開田早生の開花期の気象状況を検証し、改めて収量の安定には適期播種が重要な要素であることを啓発した。



写真1 開花最盛期を迎えた開田早生

■今後の課題と対応

今後も適期播種、適期収穫を啓発してそばの品質と収量の安定を図る。

(平出 有道)

伝統野菜の生産振興

■背景とねらい

信州の伝統野菜である赤かぶの安定生産がここ数年の猛暑等により厳しくなっている。

生産維持に向け栽培・採種支援等を行った。

■本年度の取組みと成果

1 赤かぶの栽培支援

根こぶ病対策として、13ほ場の pH、EC を測定し結果をフィードバック、適正な酸度矯正や施肥に活用してもらった。

また、土壌天敵によるアブラムシ類等害虫防除に向け、オオムギ（品種：てまいらず）間作の生育調査ほを王滝村に設置し、9月16日播種で畝間を十分被覆することが確認できた。

猛暑への影響については9名の生産者より生育状況等を聞き取り、次年度に向け対策等検討していきたい。



写真1 てまいらず播種 被覆状況

2 赤かぶの採種支援

11月19日、王滝村において“王滝かぶ選抜作業現地研修会”開催を支援した。

当日は採種に適するかぶの選抜とベテラン農業者から一連の作業を学ぶとともに、今後の管理に



写真2 研修会の様子

ついて留意点などを野菜専門技術員よりアドバイスを受けた。

(小川 章)

家畜飼養管理の改善

■背景とねらい

木曽地域の畜産経営は、繁殖和牛経営と酪農経営に大きく分けられる。和牛子牛生産では飼養管理の改善による繁殖性の向上と高値で売れる子牛の育成が必要で、酪農では繁殖性の向上と乳質乳量の改善が必要である。

■本年度の取組みと成果

1 繁殖和牛経営体への支援

和牛子牛生産では、繁殖性の向上を目的に代謝プロファイルテストを木祖村の2戸に対して実施し、JA、家畜保健衛生所と連携した飼養管理の改善点について検討した。

また、飼料給与について相談のあった木祖村1戸、大桑村2戸に対して飼料給与診断を実施しJAと連携し給与メニューの提案を行った。

提案	氏名	Tel				住所
診断日	R7.9.5					
登録名	ちゅう	こうふく765	ゆりきよ	こうふく724	いちじく	
体重 kg	538	630	557	531	500	
産次	11	4	9	5	11	
分娩年月日	R6.5.5	R6.6.15	R6.8.25	R7.1.25	R7.2.2	
分娩後(週)	70	64	54	32	31	
授乳期週	33	33	33	33	33	
サイクル	乾乳	乾乳	乾乳	乾乳	乾乳	
最終産付	R7.8.18	R7.8.10		R7.8.8	R7.8.24	
分娩予定	R08.05.30	R08.05.22		R08.05.20	R08.06.05	
妊娠増飼						
コード	5	6	6	5	6	
飼料名	現給与量1	現給与量2	現給与量3	現給与量4	現給与量5	
23 スター輸入乾草	6.00	6.00	6.00	6.00	6.00	
22 フェスタ輸入乾草	2.00	2.00	2.00	2.00	2.00	
33 牛グリーンパケ	1.50	1.50	1.50	1.50	1.50	
合計 kg, g	9.50	9.50	9.50	9.50	9.50	
乾物充足率 %	117%	103%	111%	118%	124%	
DM/体重 %	1.5%	1.3%	1.4%	1.5%	1.6%	
T D N 充足率	132%	114%	128%	133%	140%	
C P 充足率	159%	141%	155%	160%	167%	
C a 充足率	191%	163%	184%	193%	205%	
P 充足率	89%	76%	86%	90%	96%	
Ca/P	2.0	2.0	2.0	2.0	2.0	

図1 繁殖和牛飼料計算ソフトによる飼料計算画面

2 酪農経営体への支援

酪農経営体に対しては、JAや協同乳業、畜産試験場、家畜保健衛生所と連携して牛群ドックを行い、乳質の維持や飼養管理の改善に向けた検討を行った。

■今後の課題と対応

引き続き関係機関と連携して代謝プロファイルテストや牛群ドックを実施し、飼養管理の改善や乳質の維持に向けた検討及び指導を行う。

(木船 宗一)

自給飼料生産の拡大

■背景とねらい

近年購入飼料価格の高騰により畜産経営が圧迫されており、自給飼料の安定生産が課題となっている。また、木曾地域は遊休荒廃地が増加しており、自給飼料生産を維持・拡大する畜産経営体が重要な担い手となっている。

■本年度の取組みと成果

1 自給飼料の生産安定

郡内の6戸に対して牧草やアンモニア処理稲わらなどの自給飼料分析や硝酸態窒素分析を行い、適期収穫及び肥培管理について指導した。

また、極晩生ソルガムの栽培管理の把握や収穫調査を行い、生育状況を把握した。

2 作溝播種機を用いた草地更新の実施

令和5年度に南木曾町の長根草地で作溝播種機を利用した簡易草地更新の実演会を実施した。

6月に家畜改良センター茨城牧場長野支場と植生調査を実施したが、草地の立地条件が不利であったことや甚だしい獣害により植生は悪化していることが分かった。



写真1 長根草地の植生調査

■今後の課題と対応

自給飼料の安定生産に向けて、適期収穫や適切な肥培管理について啓発していくほか、環境や地域の変化に対応した新品種を積極的に検討し、自給飼料生産の拡大につなげたい。

(木船 宗一)

稲 WCS の安定生産および利用

■背景とねらい

木曾では水田転作で稲WCS専用品種が約10ha作付けされており、主に食用米を生産する法人と繁殖農家が作付けしている。品種は早生である「つきはやか」と晩生である「つきすずか」の2品種である。

「つきはやか」の出穂期は8月上旬であり、食用米の収穫前に収穫可能であるが獣害が課題となっている。「つきすずか」は獣害が比較的少ないことや、刈取適期が10月中旬であることから広く作付けされている。しかし、食用米収穫作業の遅延や天候の影響により刈り遅れによる品質低下が課題となっている。

■本年度の取組みと成果

本年も「つきはやか」で出穂前のイノシシによる被害があったため出穂前の刈り取りを希望した法人から相談があり、サンプリング調査等を行い利用上の留意点を指導した。

また、「つきすずか」より晩生である「つきことか」を試験的に栽培し、現地適応性と食用米収穫後の適期収穫の可能性について検討した。収量は「つきすずか」と概ね同等で11月上旬時点で黄熟期であったことから、耕種法人で来年作から作付けを拡大する意向を示した。



写真1 収穫調査の様子

■今後の課題と対応

次年度は「つきことか」の安定生産と利用先である繁殖農家が求める品質の確保に向けて指導していく。

(木船 宗一)

野生鳥獣被害対策

■背景とねらい

野生鳥獣による農作物への被害は生産量の減少と共に農業者の耕作意欲を減退させ、農地の荒廃化や農村環境が持つ多面的機能の低下にもつながり集落機能の維持にも影響を及ぼしている。

木曽地区野生鳥獣害被害対策チームでは、野生鳥獣による人身被害の回避や農林水産業被害の軽減を図るための活動を展開している。

■本年度の取組みと成果

7月に農業入門講座で電気柵設置演習を開催し、受講生のみならず町村担当者や農業委員を広く参集した。演習には（株）協和テクノを講師として招き、電気柵の適切な設置方法などの実践的な技術を学んだ。

本年度はツキノワグマによる農作物への被害のほか人身被害も発生したため、町村等と連携した注意喚起や電気柵の集重点検を実施した。

7～9月に木曽町、王滝村、上松町、南木曽町の4町村で10カ所の電気柵の機能点検を実施した。効果的な柵の設置について指導し、改善を促した。



写真1 電機柵設置演習(木曽町)

■今後の課題と対応

町村や農業団体、農業者個人が正しい技術や知識を習得し、現場で自ら対応できるよう木曽地区野生鳥獣害被害対策チームで支援を継続する。

(木船 宗一)

地域計画の実践支援

■背景とねらい

農業経営基盤強化法等の一部改正に伴い法定化された「地域計画」については、前年度末に管内6町村で15の計画が策定された。この計画は地域で話し合いを継続し年1回以上見直し（更新）することとなっているため、協議の場開催にあたっての支援活動を実施した。

■本年度の取組みと成果

1 協議の場への参加

各町村役場を巡回して地域計画実践の進捗状況を聞取るとともに、集落で開催された協議の場へ出席して地域農業・農地の維持発展について助言を行った。

(1) 地域計画策定状況

町村名	計画数	集落数
上松町	1	14
南木曽町	6	27
木曽町	5	46
木祖村	1	1
王滝村	1	7
大桑村	1	11



写真1 地域における協議の場の様子(木曽町)

■今後の課題と対応

地域計画の推進に係る課題解決支援のため3町村4地区の地域計画を重点支援対象と位置づけた。ロードマップを作成し支援チームとしての取組を進める。

(清水 伸也)

地域性を活かした 遊休荒廃地対策

■背景とねらい

中山間地に位置する木曾地域は、農業者の高齢化、担い手不足、野生鳥獣被害により年々遊休荒廃地が増加している。木曾町開田高原でも同様の状況にあるが、地元で古くから栽培されているそば「開田早生」の生産振興によって、こうした状況に歯止めをかけようと活動しているNPO法人がある。支援センターではこの活動を栽培技術の側面から支援している。

■本年度の取組みと成果

1 そば「開田早生」の食味追及

NPO法人では、開田高原で古くから栽培され評価の高いそば「開田早生」の食味を更に追及すべく信州大学農学部からの指導を得て、子実の小粒化による食味・風味を高める栽培法の探求を進めている。

また「開田早生」の夏そばとしての適性を検証する試験を実施し、支援センターでは試験栽培の技術的な支援をして、安定収量を得る播種適期を確認した。

2 「開田早生」を守る会の活動支援

「開田早生」の生産者、実需者からなる情報交換会を定期的に開催し、会員相互の情報交換をしている。



写真1 「開田早生」の食味試験

支援センターでは、開田早生の収量品質向上対策に関する情報提供をしてそば生産に対する意識の高揚を図ってきた。

■今後の課題と対応

支援センターでは、引き続き「開田早生」の収量・品質・食味を高める技術的対策を継続することにより、開田高原の遊休荒廃地対策を支援していく。

(平出 有道)

環境にやさしい農業の推進

■背景とねらい

近年の気候変動による夏の高温干ばつや集中豪雨の発生等への対応、環境への負荷を低減した農業、安全安心な農畜産物に対するニーズが高まる中で、環境に配慮した農業生産を志向、実践する農業者への支援を中心に取り組んだ。

■本年度の取組みと成果

1 環境にやさしい農産物認証取得への支援

令和7年度の認証取得と生産に向けて、令和6年度に化学肥料と化学合成農薬を50%削減した糯米の試験栽培を行い、生産可能な確証が得られたことから認証取得に向けて施肥設計や防除計画作成から申請、栽培状況確認や現地審査への対応、継続申請に向けた支援を行った。

また、令和8年度のブルーベリーでの認証取得に向けて、有機質主体の施肥設計や防除計画の作成等の申請支援を行い、次年度環境にやさしい認証生産者が1名増える見込みである。

2 有機・環境農業志向者・実践者への支援

有機農業での就農を希望する地域おこし協力隊出身者に基礎的な栽培技術の指導、町村と連携した就農相談、就農計画作成を支援した。



写真1 9月の有機・環境農業のほ場視察

管内には、野菜類の有機不耕起栽培及び平飼い採卵鶏の新規就農者と有機JAS及びGLOBAL-GAPの認証を取得したきのこ生産法人がいる。それらの有機農業志向者や実践者に対して、オーガニックアカデミー等の情報提供を行った。

また、今年度は有機農業以外にもエコファーマー取得者やみどり認定申請希望者、環境にやさし

い農産物認証取得者等、環境に配慮した農業を目指している方、実際に取り組んでいる方からの要望もあり、それぞれの取組み状況や課題についての情報交換会を9、12月に開催した。

9月の実践者のほ場視察と座談会では、志向者の取組みが紹介され、活発な質問や助言も出され沢山の学びがあったとの声も聞かれた。

12月は担当専技から緑肥等を活用した県下の有機農業の事例と耕種的防除等を組合せたIPM(総合的病害虫管理)の話題提供が行われ、志向者から栽培上の課題、雑草や病害虫管理などが発表され、参加者からは今後のヒントが得られたとの声も聞かれた。町村からは有機・環境農業への支援や取組、実践者の動向について報告が行われ、支援体制の違いも共有され、GAPの取組みや有機JASやみどり認定、環境にやさしい農産物認証等の各種制度について紹介、環境保全と食の安全確保の両立に向けた取組みの重要性が改めて確認され、今後の連携強化に向けた貴重な情報交換の機会となった。



写真2 12月の有機・環境農業情報交換会

3 GAP認証取得・取組みへの支援

農業入門講座や農業委員会、情報交換会等での県適正農業規範とGAPの説明、各作目の生産者確認表の活用について啓発した。

■今後の課題と対応

次年度以降も信州の環境にやさしい農産物認証取得者、有機農業や環境への負荷を低減した農業生産の志向者や実践者、GAP認証取得者、関心のある方を対象に支援を継続していく。

(大島 洋一)

地産地消と食育の推進

■背景とねらい

木曾地域特産加工開発連絡会は特産加工品の原料確保、加工技術の向上や販路拡大を目的とした組織であり、木曾農業農村支援センターが事務局となっている。加工連で取り組んでいる販路開拓について支援を行った。

また、木曾の文化の未来の担い手である子ども達を対象とした食育を推進した。

■本年度の取組みと成果

1 農産物加工品の認知度向上に向けたPR活動支援

木曾特有の加工品である朴葉まきの認知度向上のため、郡内でPR販売を行った。6月7日(土)道の駅大桑、6月14日(土)道の駅日義の2会場で木曾地域特産加工開発連絡会6団体が朴葉まきを出品し観光客及び地元消費者に販売した。

2 食育の推進・信州の伝統野菜栽培事業

木曾ならではの食文化を生かした食育を進めるため、9～12月にかけて木曾町福島小学校において信州の伝統野菜栽培支援事業を活用した赤かぶ栽培授業を1クラス27名に実施した。この授業では、木曾地域で古くから取り組まれている赤かぶの栽培から「すんき漬け」加工までの体験を支援した。

児童らが作った漬物は「すんき品評会」に出品され、高評価を得ることが出来た。

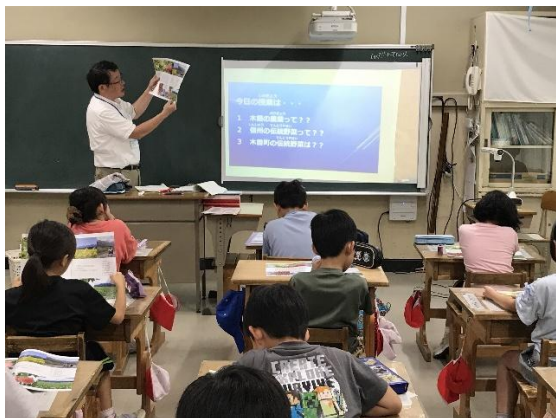


写真1 福島小学校伝統野菜の授業

また、上松小学校において、児童が育てた「芦島かぶ」「吉野蕪」を利用した「すんき漬け」製作

授業を1クラス24名に行った。



写真2 上松小学校でのすんき作り授業

3 「木曾牛給食の日」における食育授業

JA、町村、支援センター等で構成される木曾優良子牛生産パワーアップ協議会では、木曾地域の畜産業に対する理解増進、木曾牛の消費拡大を図るため、学校栄養士会と連携した「木曾牛給食の日」を実施している。

郡内のほぼ全校に対して木曾牛肉を学校給食に提供したほか、希望のあった学校に訪問し木曾牛についての食育授業を実施した。

本年度は郡内の小中学校計4校に訪問し、食育授業を実施した。



写真3 福島小学校での食育授業

授業を受けた児童からは、「お肉は苦手だけど、頑張って食べてみることにした」、「もっと牛のことを知っているんなりに言いたいなと思った」などの感想があり、木曾牛への関心がより深まったと思われる。

(木船 宗一、高瀬 千栄)

Ⅲ

調査研究活動

令和7年度 調査研究課題実績書

木曾農業農村支援センター

課題名：「御嶽はくさい」における土壌診断に基づいた適正施肥の検討

要約

直播で栽培される「御嶽はくさい」における可給態窒素量に基づいた適正施肥を検討するため、開田高原（標高約 1250m）の圃場で栽培試験をおこなった。現地の栽培体系に基づき、5月に施肥・マルチングし、例年生育が最も前進する7月播種、9月収穫の作型で試験した。基肥減肥区は、窒素 20%減肥区（基肥の窒素のみ減肥）を設け、9月8日に収穫調査を行った。試験結果を圃場主及び J A 技術員と検討した結果、当条件下での基肥 20%減肥は可能と思われた。

担当者:職名・氏名 課長・清水伸也 主査・田中敬志 ○主査・小川章

1 課題設定の背景と目的

直播で栽培される「御嶽はくさい」は地域を代表する農産物である。近年は高温期の作型で生育の前進傾向が強く適期収穫が難しく、ゴマ症といった生理障害の発生もみられている。こうした現象の要因の一つとして窒素施肥が過剰になっていることが考えられる。

普及技術により、ハクサイにおける可給態窒素を基準とした適正施肥が示されているが、「御嶽はくさい」は普及技術と異なり分施であることから、可給態窒素がどの程度施肥の目安になるか不明である。令和6年度に木曾町開田高原で試験を行った結果、可給態窒素を目安に基肥減肥できる可能性が示されたので、本年度は再度試験実証することとした。

2 調査研究の内容

- (1) 実施時期 令和7年5月 22 日(基肥施用)、5月 23 日(マルチング)～9月8日(収穫)
- (2) 実施地区 木曾町開田高原(標高 1250m)
- (3) 耕種概況 品種「信州大福」

播種日:7月 16 日(直播) 収穫日:9月8日(播種 54 日後)

栽培様式等:銀黒マルチ(下駄マルチ)で、栽植密度は株間38cm、条間 65cm とした。

施肥:

基肥:御嶽はくさい専用肥料(8.6-10.7-4.6)

追肥:NK-204

施肥日 基肥散布:5/22 追肥①:8/4 追肥②:8/17 追肥③:8/26

基肥散布当日に畝立て・マルチングした。

- (4) 調査研究方法

基肥施肥前に試験圃場の可給態窒素量を測定したところ、4.9mg/100g 乾土であった。「パックちゃん」を用いて計算したところ、全量基肥の場合、適正施肥水準は慣行窒素投入量(21.6kg/10a)の約 80%(4.0kgN/10a 減肥可)となった。これをもとに表1のような基肥減肥区を設けた。防除等の管理については試験農家に一任した。

表 1 試験区と窒素施肥量 (kg/10a)

区	基肥		追肥			合計
	慣行比		1回目	2回目	3回目	
基肥減肥区	6.9	80%	6	3.5	3.5	19.9
対照区	8.6		6	3.5	3.5	21.6

試験区の構成

元肥減肥区:窒素 20%減肥区(基肥の窒素のみ減肥)

対照区:慣行施肥(元肥は、御嶽はくさい専用肥料、追肥は NK-204)

調査方法

生育調査:生育期間中に適宜達観調査を行った。(発芽揃い、結球始期等)

収穫調査:減肥区の収穫適期に合わせ9月8日(播種54日後)に行った。収穫調査の調査項目は優良品種選定事業に従った。

調査の規模:1区あたり3.5m×10mとし、連続する5株について、2カ所調査した。

(5) 調査依頼先 JA木曾野菜生産部会

(6) 協力機関 JA木曾(調査協力)、野菜花き試験場(1)(試験設計、可給態窒素の測定)

3 結果の概要

結球始期及び収穫期の特性調査結果は表2ようになった。基肥減肥区は、対照区と比べ調整重がやや多かったものの、結球の品質は同等であった。ゴマ症は、両区ともみられなかった。

表2 結球始期及び収穫期の特性調査

調査時期	結球始期			収 穫 期									
	調査形質	草勢	生育揃い	収穫適期	球形	球揃い	球内黄色濃淡	抽だい性	全重(g)	調整重(g)	縦径(cm)	横径(cm)	ゴマ症
基肥減肥区	中	良	9月8日	砲弾	中	中	中	晩	3592	3030	32.3	18.5	無
対照区	中	良	9月8日	砲弾	中	中	中	晩	3402	2855	33.7	18.5	無

4 考察

当初計画では1区あたり2カ所、連続する10株について調査する予定であったが、市況価格が高騰した時点での収穫調査だったため、調査株数を5株に変更したことによる影響は多少なりともあったと思われる。

参考表のとおり、試験委託農家自ら機械散布した特性調査では、基肥減肥区の調整重が対照区に比べやや少なかった。農家の感想として、基肥減肥区は対照区に比べ熟期が3日程度遅れる印象だったが、品質面での違いは感じられなかった。以上から、土壌の可給態窒素を参考に基肥減肥することは可能と思われた。

参考 結球始期及び収穫期の特性調査(機械散布)

調査時期	結球始期			収 穫 期									
	調査形質	草勢	生育揃い	収穫適期	球形	球揃い	球内黄色濃淡	抽だい性	全重(g)	調整重(g)	縦径(cm)	横径(cm)	ゴマ症
基肥減肥区	中	良	9月10日	砲弾	中	中	中	晩	3402	2837	35	17	無
対照区	中	良	9月8日	砲弾	中	中	中	晩	3582	2879	33	18	無

5 情報提供方法

JA木曾野菜生産部会の野菜技術検討会で報告した。

6 関連事業等

令和7年度地区野菜重点課題対策支援事業



【基肥減肥区(手散布)】



【対照区(手散布)】



【基肥減肥区(機械散布)】



【対照区(手散布)】

課題名：アメリカテマリシモツケの実物花木等の検討

要約：

アメリカテマリシモツケ・ディアボロの1年枝を越年させて2年枝として育成すると実物花木が得られる。導入する場合には、葉物とは定植床を区分して秋の葉物収穫を行わず、そのまま越年させる管理を行う必要がある。また、節数に対する着果段数が少なかったため花芽の充実を図るため、前年の新梢の台刈り時期を早めるなどの検討が必要と考えられた。

1年枝の葉物では、慣行の冬の台刈りのみの場合、樹高が2m前後まで伸長し倒伏しやすいため、フラワーネットが必要である。また、新梢の台刈りによる低樹高化の方法で倒伏防止を図る場合は、昨年実物花木向けに台刈りを行い、秋の葉物収穫期に十分な切り枝長が確保できた5月下旬か、あるいは5月上中旬、6月上旬等の台刈りを検討する必要があると考えられた。

担当者：職・氏名 ○主査・大島 洋一、主査・平出 有道、技師・木船 宗一、主事・高瀬 千栄

1 課題設定の背景と目的

木曾地域では、高齢化・担い手不足、鳥獣被害等による農地の荒廃化対策として、女性や高齢農業者にも取り組み易く、鳥獣害を受けにくい品目として、花木の生産振興を進めている。

その中で、新規花木の一つとしてアメリカテマリシモツケ・ディアボロを導入し、葉物花木として現地適応性を調査しており、さらに葉物以外に出荷期の拡大も含めて、実物花木としての品質や市場性について検討する。また、昨年定植3年目に高木化、一部の枝が倒伏したので、フラワーネットの効果と初夏の新梢の台刈り・仕立て直し・低樹高化の効果についても検討する。

2 調査研究の内容

- (1) 実施時期 令和6年5月～令和7年10月
- (2) 実施地区 木曾郡上松町 標高890m、平均気温10.8℃、年間降水量1926mm、露地栽培
- (3) 耕種概況 品目・品種： アメリカテマリシモツケ・「ディアボロ」
定植：令和4年6月、株間50×畝間200cm

(4) 調査研究方法

・試験区

ア 実物花木・R6. 5月の台刈りあり区：R6年5月下旬に新梢を台刈りし、6月に発生した新梢をそのまま越年させ、2年枝の着果を確認する。

・R6. 5月の台刈りなし区：R7年2月に台刈り、1年枝の着果を確認する。

イ 倒伏防止・フラワーネットあり・なし区：R7年2月に台刈り、新梢をそのまま伸長させた。

・新梢台刈り区：R7年2月に台刈りし、新梢を伸長させ、6月中旬と7月上旬に低樹高化のため葉物収穫を兼ねて新梢を再度台刈りした。

・調査方法 実物切り枝本数/株、切り枝長、切り枝重、実の着生状況、1区10株（10m²）

- (5) 調査依頼先 JA木曾花卉部会・花木生産者
- (6) 協力機関 JA木曾（調査協力）、野菜花き試験場花き部（1）、農業技術課（調査協力）、木曾地区農政協議会（美花部会地方部）

3 結果の概要

(1) 実物花木の検討（立毛・切り枝調査）

表1 実物花木の検討（7月3日調査）

R6.5 台刈り	台刈り 高さ (cm)	樹高 (cm)	総枝数 (本/株)	着果枝 数 (本/株)	切り枝長 (cm)	重さ (g)	葉数 (節)	果房 段数 (節)	脱粒性 難,中,易 (1,2,3)	下垂度 (0,1,2,3)
あり	20cm	164.6	20.9	1.8	106.3	98.8	44.4	-	-	-
あり	40cm	169.7	21.8	4.2	120.9	110.0	46.7	9.8	1.0	0.6
なしⅠ	-	155.3	27.4	0	135.6	57.5	36.2	0	-	-
なしⅡ	-	155.4	28.4	0	136.6	52.5	37.7	0	-	-


樹高はR6年5月台刈り区がなし区よりもやや高く、株当たりの総枝数はR6年5月の台刈りなし区があり区よりもやや多かった。

R6年5月台刈り・新梢発生・越年した2年枝には着果したが、R7年2月台刈りで発生した1年枝の着果はみられなかった。着果した枝数は台刈り区の刈り高40cmが20cmよりも多かったが、昨年の秋の収穫期に長さ1m程で葉物切り枝として程よいサイズであったこともあり、かなり収穫されたことから2年枝の割合が減り、結果的に1年枝の割合が多くなったと思われる。

R6年秋の時点で葉物と実物区が同一のベッドのため分かりづらかったこと、慣行の冬季の台刈りのみの場合2m前後まで伸びて倒伏しやすくなるが、実物用5月台刈り区では樹高が1m程に抑えられて倒伏もなく、良い物が切れたので来年検討してみたいとの感想が聞かれた。

ディアボロの品種特性によるかもしれないが、節数に対する着果段数は1/5程度となった。

(2) 葉物花木の倒伏防止の検討 (立毛・切り枝調査)

表2 葉物花木の倒伏防止の検討 (9月26日調査) 倒伏程度: 

フラワー ネット	新梢 台刈り	台刈り 時期	樹高 (cm)	総枝数 (本/株)	2以上倒 伏枝数 (本/株)	倒伏程度 範囲 (0,1,2,3)	切り枝長 (cm)	重さ (g)	葉数 (節)	曲がり 程度
あり	なし	-	215.7	39.7	0	0.8	195.9	120.0	59.1	0.6
なし	なし	-	212.4	48.4	6.4	2.3	158.3	64.0	45.6	0.8
なし	あり	6/中	74.1	22.9	0.5	1.5	54.4	14.0	18.3	0.8
なし	あり	7/上	58.2	5.9	0.2	1.2	39.1	10.8	14.5	0.3

樹高は、新梢の台刈りなし区が2mを超え、台刈り区が80cm未満であった。

株当たりの総枝数は、台刈りなしが40本前後で収量的にも多かったが、新梢台刈りは6月刈りが20本程、7月刈りが約6本と台刈りが遅くなるほど減少し、収量への影響が大きかった。

倒伏程度は、新梢の台刈りなし・フラワーネット区では倒伏や60度以上に傾いた開帳がなく、通路を歩きやすく作業性がよかった。フラワーネットなしでは枝が2m近くと長いこともあり、通路の歩行や作業に支障を来し、新梢の台刈りありでは開帳が少なく、倒伏程度も低かった。

秋の収穫期の切り枝長は、新梢台刈りなし区が150cm以上と十分すぎるほどの長さであったが、夏の葉物収穫を兼ねた台刈り区は6月刈りが50cm台、7月刈りが30cm台で、台刈りが遅くなるほど短くなり2回切りも期待したが、結果的に規格に合わず出荷することはできなかった。

4 考察

(1) 実物花木の検討

以上の結果から、ディアボロの1年枝を越年させて2年枝として育成すると実物花木が得られることが分かった。今後実物花木として導入する場合には、葉物とベッドを分けて秋の葉物収穫を行わず、そのまま2年枝として越年させる管理を行う必要がある。また、節数に対する着果段数が少なかったため花芽の充実を図るため、前年の新梢台刈り時期を早めるなどの検討が必要と考えられた。

(2) 葉物花木の倒伏防止の検討

以上のことから、慣行の冬の台刈りのみの場合、樹高が2m程まで伸長し倒伏しやすいため、フラワーネットが必要である。また、新梢の台刈りによる低樹高化の方法で倒伏防止を図る場合は、R6年秋の収穫期に十分な切り枝長が確保できた実物花木用に台刈りを行った5月下旬までか、あるいは5月中旬、6月上旬等の台刈りを検討する必要があると考えられた。

5 情報提供方法

担当農家とJA担当者に結果報告、美花部会成績検討会、JA花き部会への情報提供 (予定)

6 関連事業等

美しい信州の花推進協議会・産地強化対策調査事業、木曾地区農政協議会

令和7年度 調査研究課題実績書

【課題名：斑点米カメムシ類の現地ほ場における2回防除による効果の確認】

農業農村支援センター名[木曾]

記入者[平出]

要約

斑点米による等級落ちが多いA町、B村、C町の現地ほ場において、病害虫防除組合が受託する斑点米カメムシ類を2回防除したほ場と1回のみ防除のほ場について、1回目の防除後3回、斑点米カメムシ類のすくい取り調査を実施し斑点米の発生率を調査したところ、2回防除したほ場が1回のみ防除のほ場より、斑点米カメムシ類の捕獲数及び斑点米の発生率が少ない傾向が見られ、2回防除を啓発する材料になることが示唆された。

担当者:職名・氏名 ○主査・平出有道、技師・木船宗一

1 課題設定の背景と目的

木曾管内の1等米比率は県下最低の水準で70%を下回り、格付け要因の殆どは斑点米カメムシ類による斑点米被害粒である。斑点米カメムシ類の防除実態は、病害虫防除組合に委託するドローンによる防除と生産者自らの地上防除により概ねの水田で実施されている。昨年ドローンによる空中防除で防除回数1回と2回の防除効果を検証する現地試験を実施したところ、2回防除することにより防除効果が上がることが確認された。

そこで斑点米多発地域において、防除組合が受託する2回防除と1回防除のほ場において防除効果を確認し、斑点米カメムシ類の2回防除を啓発する資料とする。

2 調査研究の内容

(1) 実施時期 令和7年8月～11月

(2) 実施地区 A町、B村、C町

(3) 耕種概況

移植水稻（品種：コシヒカリ）、移植：5月、収穫：9～10月

(4) 調査研究方法

斑点米多発地域の水田で、カメムシ類の防除を病害虫防除組合のドローンにより出穂期日後2回実施したほ場と、出穂期後1回のみ実施したほ場について、斑点米カメムシ類の発生頭数をすくい取り調査し、斑点米発生率を調査するサンプルを採取した。

ア 調査区の構成

2回防除のほ場：出穂期－1～＋10日後と＋12～＋17日後の2回防除

1回防除のほ場：出穂期0～＋9日後の1回のみ防除

イ 調査方法

カメムシ類の発生調査（すくい取り調査：ネット20回振）

防除前日（防除直前）、6～7日後、20～21日後に水田の上畦から約6mの水田内で採取した斑点米カメムシ類を種類ごとにカウントした。

ウ 斑点米発生率

収穫直前に上畦から約6mの水田中から、均等に22株採取し、脱穀調製後1.85mmのグレーダーで米選した玄米20,000粒中の斑点米率をカウントし発生率を算出した。

(5) 調査研究依頼先

長野県農業共済組合木曾支所に調査圃の選定を依頼した。

(6) 協力機関 JA全農長野、JA木曾

3 結果の概要及び考察

適期2回防除により、斑点米カメムシ類の発生数が抑制され斑点米発生率も低下する傾向が見られた。また水田内に雑草が多発していると防除効果が低下する傾向が確認された（添付資料参照）。

4 情報提供方法

病害虫防除組合と協力機関に調査結果を提供し、次年度の防除計画に反映することとなった。また、地区水田作検討会で関係機関に情報提供した。

5 関連事業等

1等米比率全国1位プロジェクト

(添付資料:調査結果)

表1 斑点米カメムシ類のすくい取り調査及び斑点米発生率調査結果：A町

区	出穂期	防除日	すくい取り調査（カメムシ合計頭数）			斑点米発生率 %
			調査日			
			8/13	8/20	9/3	
2回防除ほ場	8/4	1回目：8/14、2回目：8/21	0	1	1	0.58
		水田内雑草発生状況	無	無	無	
1回防除ほ場	8/12	1回目：8/21	1	2	1	1.14
		水田内雑草発生状況	ホタルイ多	ヒエ多、ホタルイ多	ヒエ多、ホタルイ多	

防除薬剤 1回目：スミチオン乳剤 8倍液0.8ℓ/10a

2回目：エミリアフロアブル 8倍液0.8ℓ/10a

※1回防除ほ場は2回目のみ防除

- 斑点米カメムシ類のすくい取り調査結果では大差は認められなかった。斑点米発生率では、2回防除ほ場は1回防除ほ場の約1/2に軽減されている。1回のみ防除のほ場内は、ホタルイ等の雑草が多発していたことが被害を大きくしたものと考えられる。

表2 斑点米カメムシ類のすくい取り調査及び斑点米発生率調査結果：B村

区	出穂期	防除日	すくい取り調査（カメムシ合計頭数）			斑点米発生率 %
			調査日			
			7/31	8/7	8/22	
2回防除ほ場	8/2	1回目：8/1、2回目：8/14	0	7	2	0.36
		水田内雑草発生状況	無	無	無	
1回防除ほ場	7/31	1回目：8/1	1	0	2	0.40
		水田内雑草発生状況	少	少	無	

防除薬剤 1回目：スミチオン乳剤 8倍液0.8ℓ/10a

2回目：エミリアフロアブル 8倍液0.8ℓ/10a

※1回防除ほ場は1回目のみ防除

- 2回防除ほ場と1回防除ほ場はやや離れており、1回防除ほ場は水田地帯に位置し、2回防除ほ場は山林に隣接している。そのため斑点米カメムシ類のすくい取り調査では、2回防除ほ場で1回防除ほ場より発生が多く見られたが、斑点米発生率は同等以下に抑えられた。

表3 斑点米カメムシ類のすくい取り調査及び斑点米発生率調査結果：C町

区	出穂期	防除日	すくい取り調査（カメムシ合計頭数）			斑点米発生率 %
			調査日			
			7/31	8/8	8/22	
2回防除ほ場	8/1	1回目：8/1、2回目：8/14	1	0	1	0.09
		水田内雑草発生状況	少	少	少	
1回防除ほ場	8/1	1回目：8/1	10	2	4	0.25
		水田内雑草発生状況	ヒエ多、ミソギ多	ヒエ多、ミソギ多	ヒエ多、ミソギ多	

防除薬剤 1回目：スミチオン乳剤 8倍液0.8ℓ/10a

2回目：エミリアフロアブル 8倍液0.8ℓ/10a

※1回防除ほ場は1回目のみ防除

- 2回防除ほ場と1回防除ほ場は近接しており、斑点米カメムシ類のすくい取り調査では1回防除ほ場の方が2回防除ほ場より多く捕獲され、斑点米発生率も多かった。これは2回防除の効果によるところもあるが、1回防除ほ場にヒエ等の雑草が多発していたことによる影響も大きいと考えられる。

課題名：稲WCS専用品種「つきことか」の現地適応性の確認・検討

要約：

稲WCS専用品種「つきことか」の現地適応性と適期収穫の可能性を確認・検討するため、試験ほ場を設置した。調査対象法人での収穫作業は受託している食用米収穫後の11月第2週からとなった。収穫時の熟期は、標準品種「つきすずか」は成熟期であったが、「つきことか」は黄熟期であった。「つきことか」は「つきすずか」に比べて生草及び乾物収量がやや優り、稈長が長く穂長が短かった。来年作からは、「つきことか」を約1ha導入していくこととなった。

担当者：職・氏名 課長・清水伸也 主査・平出有道 ○普及指導員・木船宗一

1 課題設定の背景と目的

木曽地域では、南部を中心に水田転作で飼料稲が作付けされている。稲WCS専用品種として「つきすずか」が主に作付けされているが、飼料稲と食用米を生産する耕種農家では食用米と収穫期が重なり、飼料稲の刈り遅れによる品質低下が課題となっている。

稲WCS用品種「つきことか」は、「つきすずか」よりも晩生の品種であり、食用米収穫後に適期収穫することが期待できる。そこで、「つきことか」の現地適応性と適期収穫の可能性を確認し、現地導入の可否について検討する。

2 調査研究の内容

(1) 実施時期 令和7年4月～11月

(2) 実施地区 南木曽町吾妻 標高約550m、年平均気温11.5℃、年間降水量2381.2mm

(3) 耕種概況 いずれも同一地区の隣接したほ場に作付け

調査品種：「つきことか」 移植：6月5日 収穫時期：11月中旬 利用方法：稲WCS

標準品種：「つきすずか」 移植：6月5日 収穫時期：11月中旬 利用方法：稲WCS

比較品種：「風さやか」 移植：6月5日 収穫時期：10月下旬 利用方法：食用

施肥：「つきすずか」及び「つきことか」 堆肥施用無し、BB488 20kg/10a

栽植密度：畝間30cm×株間24～25cm(品種間差無し)

(4) 調査研究方法

上記3品種について、以下の通り調査を実施する。「つきことか」及び「つきすずか」は稲WCS専用品種として、「風さやか」は食用米品種として評価する。

○「つきことか」、「つきすずか」 調査日：11月4日

①生育調査：収穫時の稈長、穂長、穂茎数/株、出穂期～成熟期の確認

②収量調査：現物及び乾物重/m² 平米刈り機を使用し、刈高10cm程度で実施

③その他品種特性を観察により確認

○「風さやか」 調査日：9月18日

①生育調査：収穫時の稈長、穂長、穂茎数/株、出穂期、成熟期の確認

②収量調査：反収（玄米重量）を聞き取り

(5) 調査依頼先 (株) JAファームきそ

(6) 協力機関

南木曽町農業技術者連絡会議（調査協力）、畜産試験場飼料環境部（区分1、乾燥機借用）

3 結果の概要

(1) 生育概況

「つきことか」の出穂期は「つきすずか」に比べて14日遅かった。収穫調査時（11/4）の生育ステージは「つきことか」で黄熟期、「つきすずか」で成熟期であった。

表1 稲WCS専用品種及び比較品種（食用）の登熟

品種名	早晩生	移植日	出穂期	糊熟期	黄熟期	成熟期	備考
風さやか	中晩生	6/5	8/10	-	-	9/15	比較品種・食用
つきすずか	晩生	6/5	9/5	9/21	10/9	10/24	標準品種・WCS専用
つきことか	極晩生	6/5	9/18	10/5	10/28	-	供試品種・WCS専用

(2) 収穫調査結果

収穫調査の結果では、生草収量及び乾物収量は「つきことか」がやや優った。「つきことか」は「つきすずか」に比べ稈長が9.3cm長く、穂長が4.2cm短かった。風さやかの収量は聞き取りで約7俵/10a (420kg/10a) であった。

表2 収穫調査結果

品種名	稈長 (cm)	穂長 (cm)	穂数 (本/株)	生草収量 (t/10a)	乾物収量 (t/10a)	乾物率 (%)	備考
風さやか	65.7	14.7	22.9	-	-	-	成熟期
つきすずか	93.2	14.0	13.5	2.9	1.1	37.9	成熟期
つきことか	102.5	9.8	15.0	3.0	1.2	40.0	黄熟期

(3) 達観による所見

全般に目立った病虫害被害は確認されなかった。雑草の発生がやや多く、特にヒエが多く発生していた。倒伏は確認されなかった。獣害は確認されなかったが、鳥類による穂の食害は確認された。対象法人の所感では、「つきことか」の方がやや食害程度が強かったとのことであった。

4 考察

稲WCS専用品種の作付けされたほ場は8月以降落水状態で管理されていたほか、雑草もやや多く発生していたことから、生育が劣り収量に大きな差が無かったと考えられた。

本年度、対象法人の食用米収穫作業は大幅に遅れ10月下旬に終了したが、10月下旬～11月初めにかけて断続的な降雨があったことから、専用品種の収穫作業は11月中旬からとなった。「つきすずか」は出穂期から約65～70日後の刈り取りとなったが、「つきことか」は出穂期から約50～55日後の黄熟期での収穫ができた。このことから、食用米収穫後であっても適期収穫ができる可能性が示唆された。

これらの結果を受けて、対象法人からの要望もあり来年作から「つきことか」を約1ha作付けし、収穫期の分散を図ることとなった。

ラップサイレージの開封は来春以降となるため、来年度は飼料成分や発酵品質を調査し、利用先である繁殖経営体の所感なども聞き取りながら、「つきことか」の本格導入を検討する必要がある。

5 情報提供方法

対象法人へ別途検討用資料をもって情報提供するほか、令和8年度南木曾町農業技術者連絡会議総会で報告する予定。

6 関連事業等 なし

IV

參考資料

令和7年の気象経過

1 月別の気象概況

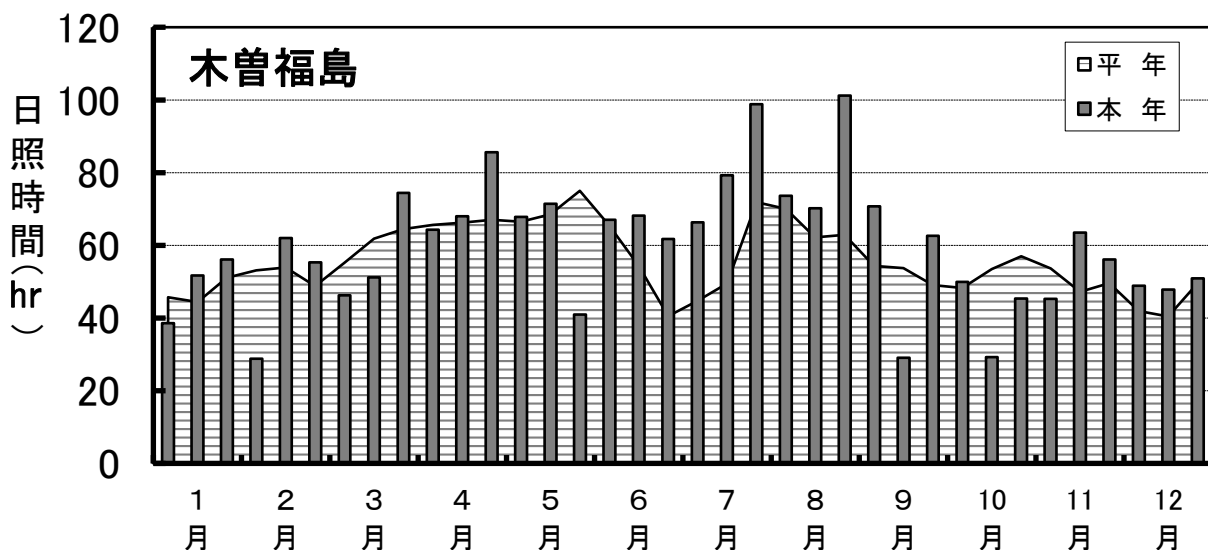
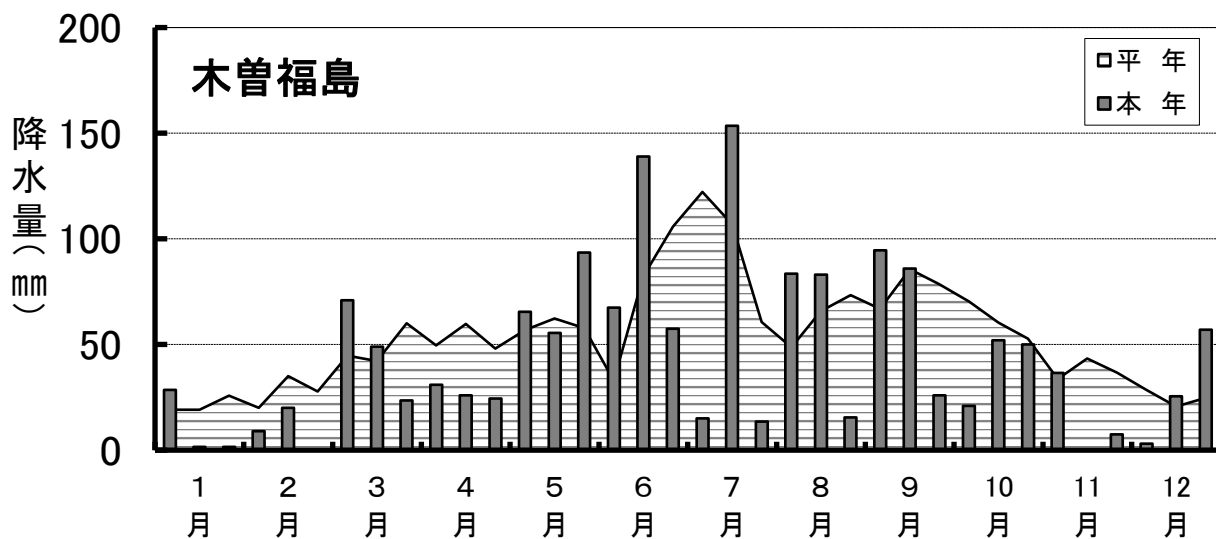
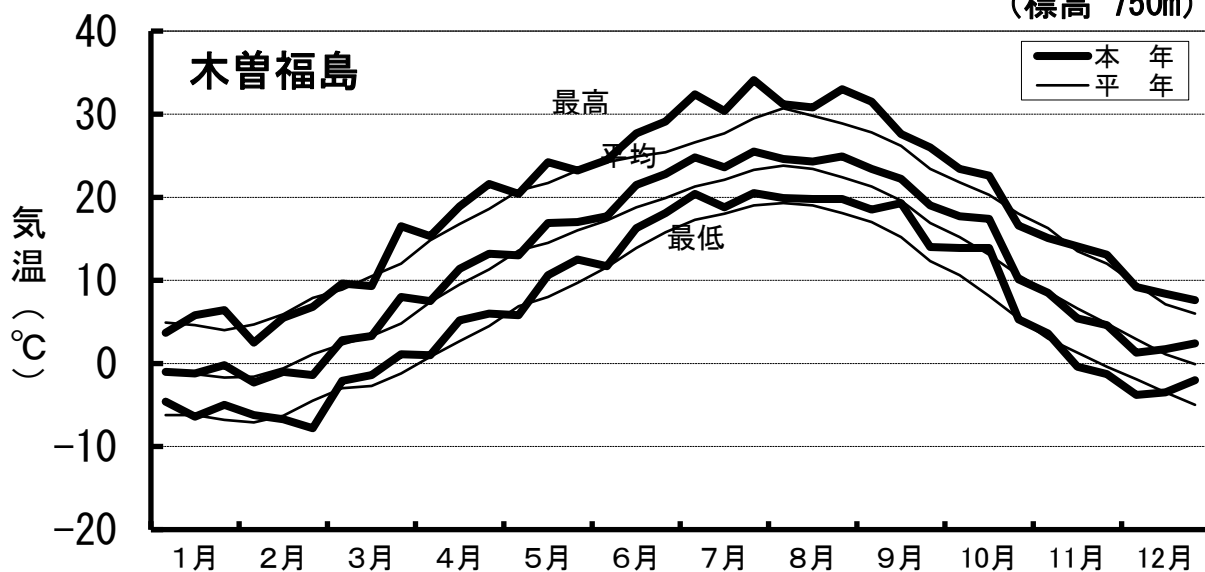
(長野地方気象台月報抜粋他)

月	気象の概要
令和7年	高気圧に覆われて晴れた日が多くなったが、冬型の気圧配置や気圧の谷の影響を受け、北部や県の西側の地域を中心に曇りや雪の日もあり、6日には南岸低気圧通過の影響で、南部でまとまった降雪となった。
1月	冬型の気圧配置が長続きせず寒気の影響が弱かったほか、低気圧の影響を受けにくかったことから、3地点で月降水量の少ない方からの値が1月として1位の値を更新した。
2月	冬型の気圧配置や気圧の谷の影響を受けて、北部や県の西側の地域を中心に曇りや雪の日があり、10日には一部で大雪によりパイプハウスの倒壊被害が発生した。その後、中南部は高気圧に覆われやすく、低気圧の影響を受けにくかったため、晴れの日が多くなった。このため、4地点で月降水量の少ない方からの値が2月として1位の値を更新した。(統計期間10年未満の地点を除く)
3月	上旬と中旬は、低気圧や前線の影響により、雨や雪の日が多くなった。一方、下旬は高気圧に覆われて晴れた日が多くなった。 なお、27日は南から暖かい空気が流れ込んだため、各地で気温が上昇し、県内の18地点で3月としての日最高気温の極値を更新した。
4月	高気圧に覆われて晴れた日が多くなったが、期間の前半は高気圧や低気圧が交互に通過し、数日の周期で天気に変化した。なお、19日は暖かい空気に覆われたことや南から暖かい空気が流れ込んだため気温が上昇し、松本今井で4月としての日最高気温の極値を更新した。 長野地方気象台が定めている標本木のソメイヨシノの開花は、平年の開花日の4月11日より3日早い4月8日となり、昨年と同じ開花日で、満開は4月13日(平年比3日早)であった。 例年影響がみられる茶とはくさいの低温・降霜の大きな影響はなかった。
5月	上旬から中旬にかけては高気圧に覆われて晴れた日が多くなったが、下旬は前線や気圧の谷、湿った空気の影響で曇りや雨の日が多くなった。なお、21日は松本など6地点で5月としての日最高気温の高い方からの極値を更新した。 関東甲信地方の梅雨入りは、平年より16日早い5月22日頃(平年6月7日頃)で、昨年より30日(昨年6月21日頃)早かった。

6月	<p>6月の天気は、前線や湿った空気の影響で曇りや雨の日が多くなったが、高気圧に覆われて晴れた日もあった。また、県内のほとんどの地点で6月としての月平均気温の高い方からの極値を更新した。</p> <p>関東甲信の梅雨明けは、平年より21日早い6月28日頃（平年7月19日頃）で、昨年より20日（昨年7月18日頃）早かった。</p>
7月	<p>7月の天気は、高気圧に覆われて晴れた日が多くなったが、上空の寒気や日中の昇温により大気の状態が不安定となり雨や雷雨となった日もあった。</p> <p>また、月平均気温、日最高気温、日最低気温の高い方からの記録で、年を通しての観測史上1位や7月としての1位となった地点が複数あった。</p>
8月	<p>8月の天気は、高気圧に覆われて晴れた日が多くなったが、前線や湿った空気の影響で大気の状態が不安定となり、雨や雷雨となった日もあった。</p> <p>また、月平均気温、日最高気温、日最低気温の高い方からの記録で、年を通しての観測史上1位や8月としての1位となった地点が複数あった。</p>
9月	<p>9月の天気は、月の前半は、高気圧に覆われて晴れの日もあったが、台風や前線の影響により雨の日が多くなった。月の後半は、晴れの日が多くなったが、前線や湿った空気の影響により、曇りや雨の日もあった。</p> <p>なお、1日から2日にかけて、10地点で9月としての日最高気温の高い方からの極値を更新した。（ただし、統計期間10年未満の観測地点を除く。）</p>
10月	<p>10月の天気は、前線や湿った空気の影響により、曇りや雨の日が多くなったが、高気圧に覆われて晴れた日もあった。</p> <p>また、長野地方気象台では、29日東方連山（志賀高原・菅平方面）の初冠雪を観測した。</p>
11月	<p>11月の天気は、高気圧に覆われて晴れた日が多くなったが、低気圧や前線、寒気の影響により曇り、または、雨や雪となった日もあった。</p> <p>長野地方気象台では、18日に初雪を観測した。</p>
12月	<p>12月の天気は、高気圧に覆われて晴れた日が多くなったが、低気圧や前線、寒気の影響で曇り、または、雨や雪となった日もあった。</p>
令和8年 1月	<p>1月の天気は、冬型の気圧配置や前線、寒気の影響で、北部を中心に曇りや雪の降った日が多くなり、大雪となった日もあった。</p> <p>一方、中部と南部では晴れの日が多くなり、低気圧の影響を受けにくかったため、4地点で月降水量の少ない方からの値が1月として極値を更新した。</p>
2月	<p>2月の天気は、高気圧に覆われて晴れた日が多くなった。</p> <p>このため、7地点で月降水量の少ない方からの値が2月としての極値を更新し、2地点で月平均気温の高いほうからの値が2月としての極値を更新した。</p>

令和7年木曾福島の気温、降水量、日照時間の推移

(標高 750m)



令和7年度の主な農作物等の生育概況について

1 作目別生育概況

作目名	生育概況
野菜	<p>★はくさい 初期生育は平年並みに推移した。定植苗の作付けは木祖村、開田高原とも4月18日に始まった。4月28日の氷点下により一部播き直しや生育遅延となったものの、概ね順調な生育で推移した。 初出荷は木祖村で6月15日と例年並み、開田高原は6月23日と昨年より4日早かった。6月～9月上旬の高温期に、木祖村で特に葉先枯れ・黄変が散見されたものの、生育はほぼ平年並みに推移し、品質面への影響は見られなかった。</p> <p>★スイートコーン 播種は木祖村は5月上旬、開田高原は5月中旬より始まった。生育は順調で8月に木祖村、開田高原とも出荷盛期となった。干ばつにより俵がやや小ぶりであった。</p>
花き	<p>★啓翁桜（ケイオウザクラ） 定植4年目にも拘らず、まだ切り枝出荷できないほ場があり、3月に確認したところ、ほ場の高低による生育差、耕盤と地下水位から湿害とみられた。 6月16日に株養成期間短縮に向けた講習会が開催され、環状剥皮は6月中下旬に実施、バウンティフロアブルの散布は7月中旬までに概ね実施された。環状剥皮とわい化剤を処理しているほ場では、2～3mの樹高に収まり、その後の生育は順調に経過しているが、未処理で4～5mの高木、大木化しているほ場も散見される。 全体に9月に入ってから早期に落葉したほ場はなく生育は順調で、10月下旬から紅葉が始まった。6月に環状剥皮した枝では、無処理の枝よりも落葉が早く10月下旬から始まり、脇芽の肥大がよい傾向であった。 10月の花芽調査で、10月中旬に雄蕊形成期、10月下旬に雌蕊形成期でほぼ花芽が完成していた。 年内出荷向けの検討では、11月中からの低温処理と12月4日の休眠打破剤処理により、ふかしハウスではなくライスセンター事務所で平日日中のみの加温であったため、1月上中の開花となったが、休眠打破剤による早期開花の効果がみられた。 1月14日のふかし（加温促成栽培）現地講習会以降から本格的に切り枝の溜め込みが始まり、選花、束に結束され、昨年まで2棟の施設でふかしが行われていたが、開花が揃わないため、今年から大桑村和村のふかしハウス1棟で加温することになり、2月6日に各生産者の切り枝束、約2,000本のハウスへの搬入が行われた。その後、2月20日に2-3分咲きとなった1,400本程を箱詰めし、市場出荷、2月25日売りとなった。まだ蕾が固い切り枝は、後日3本/1束で、地元での直売が行われた。</p>

★トルコギキョウ

4月上旬から定植が始まり、最盛期は4月中旬～下旬で7月第1週まで行われた。初期生育は概ね順調に推移したが、4月定植の一部で、灌水ムラや定植床面の凸凹等による乾燥や過湿、活着不良による生育ムラが一部でみられた。また、初期生育の遅れや夏場の高温、一部で青かび根腐病と思われる影響で短茎開花、ボリューム不足がみられ、開花直前のフザリウムの立枯病の発生もみられた。

昨年度、土壌消毒後のガス抜きから仕上げ耕起までの耕起深が、徐々に深くなっていったほ場で立枯病の発生率が高かったが、今年度逆に徐々に浅くして土壌の再汚染を防いだところ、立枯病の発生が抑えられた。

6月定植の作型は9月に出荷ピークを迎え、一部で短茎開花のほ場が認められたが、概ね順調な生育で推移し10月中旬で出荷終了となった。

★アルストロメリア

改植が4月中旬から順次行われ、生育は概ね順調に経過したが、極一部でアザミウマ類とオンシツコナジラミの発生がみられた。

昨年度に続き、夏の高温干ばつの影響で、一部の品種で花やけと葉やけが発生し、施設内の遮光資材の展張だけでは抑えきれず課題となってきたが、ハウス外面に塗布する遮熱塗布材は、ドローンによる施工費が高額なため導入が難しい。その他秋から冬にかけて、特に大きな問題はなく推移した。

★小ギク

令和6年度まで主力であった量販小ギクの株分け苗・秋定植作型は、草丈等品質がばらつき、価格も安かった。令和5年度から3名の方が試験的に取組んでいた市販優良品種の通常栽培（ハウス・トンネルへの母株伏せ込み・挿し芽育苗）が令和6年度も苗質や生育伸長、切り花品質、揃い、販売状況が量販向けよりも好調な結果となったため、令和7年度からほぼ全面的に通常栽培に切り替わった。8月旧盆向け作型では、夏の異常な猛暑干ばつのため、一部で高温抑制による開花の遅れがみられたが、大半は8月上旬に計画通りの出荷となった。9月彼岸向けについては、7月上中旬の花芽分化期の高温の影響もあったと思われるが、やや早目の開花となった。

令和6年度にオオタバコガの被害が大きかったため、4月25日～10月31日まで大桑村和村と上在郷の小ギク2ほ場にフェロモントラップを設置、随時JA花卉部会へ情報提供し、注意喚起のためJAから部会員へLINEで情報を伝達したところ、今年度の被害は大幅に減少した。

★オータムハイドラング

上松町ほ場は、秋冬に台刈り、4月から1株当たり30本前後の新梢が発生した。大桑村ほ場は、令和6年度に有機・無農薬栽培で大半の枝が花穂部が花やけ・褐変し、切り枝・収穫はほぼ皆無の状況となったこともあり、栽培

を断念、中止した。

上松町（標高 950m）では6月下旬から発蕾が始まった。令和6年度に一部の葉でみられたセルコスポラ属菌（アジサイ輪斑病）、リゾクトニア属菌、アルタナリア属菌、アジサイペスタロチア葉枯病による葉の斑点、葉枯れ症状は、防除の効果もあり今年度は目立たなかったが、一部の株で特異的にヨトウが発生し、葉の食害が目立った。

導入初年目の令和5年度からがく片の花やけ・褐変症状が課題となっており、当所は高温強日射が原因と考えられ、令和6年度に摘芯（台刈り）による開花抑制と遮光による花やけ・褐変の試験を行ったが、根本的な対策とならずに高い割合でロスが発生したため、今年度は、簡易雨除けと遮光、フラワーネットによる倒伏防止、花やけ防止を検討した。

上松町で7月中旬から開花が始まり、8月中旬にはほぼ全体が開花、がく片が白色から桃色への着色が始まると同時に露地区から花やけ・褐変が発生し始めた。がく片が硬化・着色し、花茎も硬化する9月下旬～10月下旬が切り花期となり、出荷となった。9月下旬の調査時点で、雨除け区では露地区よりも大幅に花やけ・褐変症状を抑制され、フラワーネットも倒伏防止と花やけ防止に一役買った。

★アメリカテマリシモツケ・ディアボロ

令和4年に秋定植、本年が4年目で、ヨトウムシ類以外特に問題となる病害虫の発生はなく順調に生育した。

令和5年度に樹高が1m以上、令和6年度に2m前後となり、株当たり15～20本程度発生し、9月下旬～10月中旬の出荷となった。しかし、昨年度から枝が長すぎるにより強風等で倒伏・開帳の発生が多くなり、通路を塞ぐため作業性が悪くなってきた。

そこで、今年度は夏の葉物収穫を兼ねた台刈りによる低樹高化とフラワーネットによる倒伏・開帳防止と出荷期拡大のため夏の実物花木を検討した。結果、フラワーネットは倒伏防止に効果的で、低樹高化については倒伏は防止したが、切り枝長が規格よりも短く、台刈りの時期が遅いことが分かった。

夏の実物花木については、実付き程度に課題を残したが、同時期の葉物よりも販売が好調であった。

★シクラメン

冬春の育苗から春に仮植、初夏の本鉢定植から秋にかけて、生育はほぼ順調で、高温対策は施設内遮光資材（LSスクリーン）の展張で行われ、異常な猛暑干ばつであったが、目立った葉やけ等はみられなかった。

秋以降も温暖に経過し順調に生育開花、10月中旬から出荷が始まり（3号鉢）、11月から量販向け5号鉢が出荷され、下旬頃が出荷盛期となった。

11月9日の県鉢花類コンクールで、シクラメン5号鉢が農林水産大臣賞を受賞した。

作物	<p>★水稲</p> <ul style="list-style-type: none"> ・育苗 育苗期間が高温傾向で経過したためごく一部に焼けの発生が見られたが、全体的には徒長することも無く概ね順調に生育した。一部の育苗施設でもみ枯細菌病等の病害の発生を見たが、全体的には平年並みの発生程度であった。 ・田植え 5月初旬から始まり5月20日頃ピークを迎え、5月中に概ね終了した。田植え後の活着は良く、初期生育も順調であった。 ・分けつ期 6月中旬以降高温で経過したため、分けつは順調に増加した。 ・幼穂形成期 7月以降も高温傾向で推移したため、平年より2日ほど早く迎えた。 ・出穂期 大桑村（コシヒカリ）：7/25（平年7/29、昨年7/25） 木曾町（コシヒカリ）：8/1（平年8/4、昨年8/2） 木祖村（あきたこまち）：8/4（平年8/4、昨年8/2） ・成熟期 出穂期以降、登熟期間全般を通して高温で経過したため、平年より4～5日程度早まった。 ・病害虫 いもち病については、7月上旬以降葉いもちの感染好適条件が頻発したが、高温傾向が続く中、上位葉への進展は見られなかった。一部の常発ほ場では止葉への病斑の進展が見られた。出穂後も高温傾向で推移したため、穂いもちの発生も少なかった。 出穂前から、中部から南部にかけてほ場内で斑点米カメムシ類が確認された。発生したカメムシの種類は大型のカメムシ（アカヒメヘリカメムシ、ホソハリカメムシ）の比率が例年のとおり多かった。全般に斑点米による等級落ちが多く、特に大桑、日義、福島地区の1等米比率が著しく低かった。 1等米 59.7%（格付要因：斑点米76.4%、未熟粒11.5%）で、登熟期の高温による白未熟粒の発生も目立ち、上松、南木曾、大桑地区では白未熟粒による等級落ちも平年より多い傾向にあった（昨年：1等米67.1%（格付要因：斑点米90.3%、未熟粒4.5%））。 <p>★夏そば</p> <p>木祖村でキタワセソバを5月20日～6月10日頃まで播種。開花期は6月20日頃から。収穫は7月29日頃から始まり8月末まで続いた。獣害と雑草害で著しく減収（38kg/10a）したほ場もあった（平年58kg/10a、昨年53kg/10a）。</p> <p>★秋そば</p>
----	-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

	<p>開田高原（開田早生）で、播種は7月12日から始まったが降雨のため停滞し、本格的には7月20日頃から再開され、8月20日頃終了した。蕎麦信濃1号の播種は木曾町黒川で7月11日から始まり、本格的にスタートしたのは伊谷の7月23日からで、播種終わりは日義の8月17日であった。開田早生も蕎麦信濃1号も最初に播種されたものは、降雨により湿害が発生し播き直した。初期生育は順調であったが、湿害が発生したほ場ではその後雑草害で減収した。</p> <p>収穫は開田高原の開田早生は9月21日～10月24日、木曾町の蕎麦信濃1号は10月15日～10月30日で終了した。</p> <p>開田早生は7月20日前後の適期に播種されたものは概ね1等で収量も確保できたが、7月末を過ぎて播種されたものは開花期が曇雨天に当たり不稔が多く粒張りも悪く減収した。蕎麦信濃1号も登熟期に曇雨天が多く実が細くなり、稲刈りの遅れに伴った収穫遅れによる脱粒と獣害により減収した。</p> <p>収量は昨年並みの40kg/10aであった（平年56kg/10a、昨年37kg/10a）。</p>
果樹	<p>★りんご</p> <p>5月10日の低温により標高の高い木祖村で凍霜害の影響が大きかったが、木曾町三岳では影響が少なかった。初期の果実肥大は順調で成熟期～収穫期も平年並みに推移した。腐らん病が多く、防除間隔が開いたほ場では褐斑病、斑点落葉病が多かった。</p> <p>★うめ</p> <p>木曾町三岳道の駅付近では、4月上旬に満開（昨年より約10日遅い）となった。両品種とも結実後の落果が多く、出荷は例年に比べて少なかった。</p> <p>★ブルーベリー</p> <p>6月に落葉性の病害が例年多いところで発生した。結実や収穫は特に問題はなかった。</p>
畜産	<p>★和牛子牛</p> <p>和牛子牛価格の低迷や高齢化による離農により全国的に繁殖経営体数が減少したことで和牛子牛への需要が高まり、価格の低迷が始まってから初めての価格上昇傾向が見られた。木曾地域の令和7年度平均価格は去勢66.8万円、雌57.3万円で、雌雄合わせた平均価格は前年度比129%であった。</p> <p>★ソルガム</p> <p>早いところで5月中旬、遅くとも6月下旬の播種となった。サイレージ調製は10月上旬頃から、青刈り利用は11月上旬ごろからであった。一部のほ場で未出穂型品種「風立」の出穂が確認されるなど、温暖化による影響が見られた。</p>

★稲 WCS

稲 WCS 専用品種「つきはやか」は生育期間中高温で推移したため生育は良好であったが、例年の出穂期である8月上中旬にイノシシによる被害が発生した。そのため収穫はやや早刈り傾向であった。

稲 WCS 専用品種「つきすずか」についても生育期間中の高温により出穂がやや早まったため、食用米の収穫後に収穫したほ場では完熟期となり、刈遅れとなった。

★牧草

牧草1番草の刈り取りは5月より始まり、6月には雨間での刈り取りとなった。2番草の刈り取りは8月に始まり10月に終了した。牧草地が大面積かつ飛び地の経営体では刈り遅れが散見された。

気温が高く推移した地域では2番草の立ち上がりも良好で、3番草の刈り取りが11月まで続いた。

本年は降雨の前後で晴れ間が続く日が多く、予乾が進んだことで比較的良質なサイレージを確保できた。

令和7年度 職員体制と業務分担表

職	氏 名	担 当	事 務
所 長	倉田庄一郎	総括	
課 長	清水 伸也	【木曾町】	センター運営（予算、職員研修） 普及計画、活動実績、農業表彰 食育（副） 農村生活マイスター事務局（副） 特産加工開発連絡会事務局（副）
主 査 普及指導員	田中 敬志	【木祖村】 担い手・経営 果樹	就農コーディネーター PALネットながの 制度資金 農業経営者総合サポート事業
主 査 普及指導員	平出 有道	【大桑村】 作物 集落営農	農作業安全 遊休農地対策 スマート農業（窓口）
主 査 普及指導員	小川 章	【玉滝村】 野菜、菌茸 特用作物 土壌肥料	生育状況 伝統野菜 土壌診断
主 査 普及指導員	大島 洋一	【上松町】 花き 病害虫 植物防疫 環境	災害 農薬相談員 環境にやさしい農産物認証 GAP、有機農業
普及指導員	木船 宗一	【南木曾町】 畜産 特用作物（茶） 鳥獣害対策	農業入門講座 農薬相談員 知的財産 情報
主 事	高瀬 千栄	女性農業者 農産物活用	マーケティング、6次産業化、地産地 消、食育、都市農村交流 農村生活マイスター事務局 特産加工開発連絡会事務局